

# 『原爆詩一八一人集』出版記念会・全記録

## ◎第一部 参加詩人あいさつ

司会・長津功三良(ながつ こうざぶろう) 皆さんこんにちは。大勢の皆さんとこういう有意義な会合に出るのは、大変うれしく思っております。

それでは、第二部に入りたいと思います。最初に、詩集に参加していただいた方の中で主なメンバーの御庄博実さんをご出席できなかったので、後ほどメッセージを読ませていただきます。

まず最初に、日本現代詩人会の前会長でもあり、現在は「龍生塾」ということで若手の育成に尽力されております長谷川龍生さん、ご挨拶をお願いいたします。『一八一人集』の解説も書いていただいております。

長谷川龍生(はせがわ りゅうせい)

百八十一人の原爆詩の出版、おめでとうございます。

じつは、去る十一月十四日に読売新聞のコラム欄に「エノラ・ゲイの顔」という文章が載っておりますので、これをちょっと読ませていただきます。

《「一つだけはっきりさせておきたい。私の飛行機の搭乗員はだれ一人心の病を抱えていないし、眠れない夜を過ごしていない」》 | | これは読売新聞大阪本社編集委員の竹村登茂子さんという人が書いているコラムの文章であります。一九八五年、アメリカの雑誌のインタビューでポール・ティベッツというエノラ・ゲイの機長さんがそういうことを言ったわけです。

《六十二年前の原爆投下に関してこう答えてきたポール・ティベッツ氏が今月、九十二歳で亡くなった。広島に原子爆弾を落としたエノラ・ゲイ機の機長。……操縦技術に優れ、爆弾を投下するために生まれてきた男」と言われていたそうだ。》

被爆者でおそらく唯一彼に会った人がいる。元広島平和記念資料館長の高橋昭博さん(七十六歳)。二十七年前、初めはこわばった顔をしていたが、面会后約三十分間高橋さんのケロイドの残る手を握り続けてくれた。その時も「再び命令が下れば同じことをします」とポール・ティベッツ氏は断言した。そして、「だから戦争を起こしてはいけません」と。「恨みな自身や広島が味わった苦しみは消せるわけではないが、だから…」とさすってくれたから、高橋さんは約十年にわたってそのポール・ティベッツと手紙を交換し続けた。彼からの返事は三通に一通ほど。原爆への質問にも、近況を尋ねた時も、丁寧な手紙が来た。しかしいつしかそれも途切れた。この英雄も彼に向けられた被爆者との接触を嫌う何かを感じたのではないかと高橋さんは思う。

英雄にも憎悪の対象にもなったティベッツ氏は、死にあたって墓や葬式を拒否したという。「彼なら、そうするだろうと思いましたよ。彼なりの良心でしょう」と高橋昭博さんは言う。「人間の顔が出てきたのだと思います」。本当の顔を隠した半生。もしそうなら、苦い時を送ってきたのだろうと書いています。

この前に私は、長津さんが詩を書いています、テニヤン島から出発したエノラ・ゲイのいろんな飛行機の中の非常に細かい日記、つまりテニヤン島からエノラ・ゲイが飛び立って、そして広島の上空へ来て、そして原爆投下をして、そしてそれからまたテニヤン島へ帰って行くいろんな状況を細かく

書いたエノラ・ゲイという飛行機の中の日記があるのですが、その日記の現物、ドキュメントがアメリカで二千万円で競り落とされた。それが誰の手に渡ったかということとは分からないというふうな記事を、このコラムを発見する前に私は読みました。

そういうものを読んでいて、どうもやはりこの読売新聞の竹村登茂子さんの記事も脇が甘いという感じで、ちょっと(笑)今の日本のマスコミはもっと深く突っ込んで書くというふうな、つまり考え方やそういう心構えみたいなものが無いですね。そう思って、これはやはり『原爆詩一八一人集』の英語版というものができると、それが発信されて全世界に広まって行くということは、ものすごく大切なことだと思いますし、できれば私としてはフランス語にも翻訳してもらいたい。それから、ロシア語にも翻訳していただきたい。それからアラブの方の言葉にも翻訳していただきたい。それから中南米の方の言葉にも、ベネズエラ、それから……いろんな言葉に翻訳して、世界に広まってもらいたいという気持ちがあるわけです。それは例えばロシア語に翻訳した場合は、かつてのソ連の方もソ連が崩壊してそしてロシアの民族国家にいろいろ細かい国が出来て、それでそこにもロシア語で浸透していく。するとその民族国家が民族の言葉でそれをまたさらに翻訳していくだろう。それからフランス語ならば、フランスのかつての植民地がありますし、北アフリカのアルジェリアとかモロッコとかいう所にもやはりその国々のインテリだとか何かフランス語を知っていますので、そういう所にも浸透していくだろうと思っています。

この『一八一人集』が一つの大きな打撃力になって世界に浸透していけば良いのではないかと私はずっと思っています。それはもちろん鈴木比佐雄さん、長津功三良さん、そして山本十四尾さんのいろんなご努力にさらにまた今後ご努力を重ねていただきたいと思っているわけです。特に長津功三良さんは、来る二十四日に小野十三郎賞の授賞式がありまして、その時に長津功三良さんの書いた詩集『影たちの墓碑銘』の授賞式がありますので、これも一つの決定になるのではないだろうかと考えております。この詩集が、もちろんたくさんのいろんな日本のマスコミの地方新聞などいろんなところに取り上げられましたけれども、さらにもっともっと輪を大きくして、そしてその波紋が全世界に通じるようになればと思っております。

それと同時に、つまり原爆の作品をいろいろ書いていく時に、今後世界のいろいろな紛争、それから戦争で非常に惨めな思いをしている貧しい人達、また貧しいところに落とされ込まれた人達にも通じるような、そういう何か運動もあれば良いのではないかと思ったりもするわけであります。我が国の広島・長崎に関しては、広島と長崎のこのスラングという、都市の中におけるそういうところを少し際どく洞察して行って詩を書いていただきたいと思うわけでございます。

少し長くなりましたが、本日は皆さま、全国から来ていただきまして大変ありがとうございます。さらに、先ほど山本さんがおっしゃいましたけれども、この輪をさらに大きくして行ってまいりたいと思う次第であります。これで挨拶を終わります。(一同拍手)

長津功三良 長谷川さん、どうもありがとうございました。

この『一八一人集』はまだまだ完全なものとは言えないと思うのです。いろいろとまだ手落ちとか、遺族の方にご理解が得られなくて載せていないという問題もあるし、「実は私も原爆詩をずいぶん前から書いていますよ」という方も後からいろいろ聞いたりしています。いずれ鈴木さんや山本さんとかご相談をして、できるだけまた多くの方を入れた「原爆詩といえばこれだ」というふうな本にまとめていきたいと思っておりますので、ご協力をお願いします。

続きまして、原爆詩集にも「ヒロシマが告げるもの」(『一八一人集』二八八頁)という解説を書いていただきました石川逸子さんにご挨拶をお願いしたいと思います。

石川逸子(いしかわ いつこ)

大勢の素晴らしい詩人達がお見えになっていらっしゃいます中で早めにご挨拶するのは申し訳ないようなのですが……。今日もこちらに来る途中で改めてこの『一八一人集』を読んでいたのですけれども、ちょうど広島・長崎の被爆者、それ以後の核被害の方たち、その方たちの被害、そしてまた人生というのがそれぞれ一つひとつ全く違う顔を持っているように、このたびここに寄せられた一人

ひとりの詩はそれぞれその方の人生を踏まえて違う顔を持ち、そしてその中で互いが響き合い素晴らしいオーケストラを奏でているような気がいたしました。そして一刻もこれが早く日本だけでなく世界に向けて発信されることを、関係者の方たちは非常に大変だと思いますがお願いしたいと思います。今日はほんとうに皆さま、おめでとうございます。

わたくしは思っていることは解説に書かせていただきましたので、今日は少し詩と離れるかもしれませんが、ごく最近ちょっと立ち寄ったことについてお話ししたいと思います。

去る十一月一日に、韓国の平澤(ピョンテク)という所から旧三菱に強制連行された方たちの最高裁の判決がございまして、これは非常に画期的なことだと思うのですけれども勝訴し、そして日本の国はこの人達に国家賠償しなければいけないということが決まったのです。それで、少しこれはややこしいのですが、韓国ほか日本の広島・長崎で被爆して日本の外に住まわれている方たちに対しては、特に一番人数が多いのは韓国、北朝鮮にも今居られるようですがこの朝鮮人の方たちへの差別政策だったと思うのですが、非常に冷たい扱いを日本政府がしてまいりました。本来ならば植民地にしたがゆえに日本に強制的に連れて来られた、あるいは、土地を奪われたために日本に来ざるを得なかった方たちが非常につらい条件の中で軍事都市の広島で働かれていたわけですから、そこで被爆した方たちについては日本人よりも先に補償し援護すべきだったと思いますが、その反対でした。

それで、今回勝訴された方たちというのは、わたくしも一度行ったことがあるのですが、平澤(ピョンテク)という所から年齢徴用といまして二十二歳だった方たちが、ちょうど一家の大黒柱になる人達が、突然に「何が何でも来い」と言われて引っ張って連れて来られた。釜山(プサン)からは三菱の印が付いた帽子を被った人達に引率され、そして日本人の警官に見張られて汽車の中ではトイレも行けなかったという監視状態の中で連れて来られ、そして働いているうちに被爆なされたわけですね。わりあいに三菱は爆心地から離れていますが、その時の状況でまたお一人ひとりにも被爆の状況は違うわけですけれども、このたびの裁判は一九七四年に旧厚生省が「日本に来た者については被爆者手帳を出す」。これも孫振斗さんという方が裁判を起こした結果そうなったのですが、ただ、日本にいる間はその手帳は有効で健康管理手当というのも出すけれども、一旦外へ出たら、国へ戻ったらもうそのお金は出さないという通達を局長が作ったのです。それに対して韓国の方たちは非常に憤慨されて、そして今度は他の韓国の方が「いったい日本は法治国家なのか？ 法律よりも一局長の通達の方が上なのか？ それを問いたい」ということで裁判を起こされまして、これが「厚生省がおかしい」という判決が下ったのです。そうしますと、その判決が下ったのを受けて三菱に連れて来られた方たちが「自分達はもうどうせ日本に行つて被爆者手帳をもらったとしても国に暮していればお金は出ないのだから、行つてもしょうがない」というような形でそのまま過ごして来たけれども、これは日本の国の責任なのだからその間の受けた損害を賠償してほしいとこういう裁判を起こされたのです。それが十二年がかりで地裁、高裁すべて原告の方たちが勝ちまして、そして今回最高裁で確定したのですけれども、もうその間に四十人以上おられた原告の方たちはほとんど亡くなられてしまいました。それから三菱は、連れてくる時に「給料の半分は家族に送ってやるから心配するな」と言って皆信じていたのですが、帰ってみたら送られてなくて、その間に働き手が無くて乳飲み子が餓死していたり、それから朝鮮総督府に何から何まで供出させられて、屋根が剥がれて青空の中で家で暮らしている。そういう家族の許へ帰って行ったということがありました。

ところで、この今回の訴訟が勝つたということは幾つかの要因があるのですが、その一つは、韓国の被爆者の個人の方が「まずとにかく自分が闘う」という形で闘われ、それを韓国の協会も日本人などの支援者も支援したということがあります。それで何回も何回もいろいろな方たちがやられたということ。それからもう一つは、それまでバラバラに日本政府に要求していた在外被爆者 | 被爆後に日本からアメリカに渡って行かれた在米の被爆者というのはほぼ日本人です。それからブラジルにやはり行かれた方々。ブラジルに行った人は、もう広島が廃墟になったので「ブラジルに行くと良いことがあるぞ」という日本の宣伝に乗せられて行ったところが、向こうで非常に大変だったというご苦労なされた方たち | この方たちが自分達も日本国内の被爆者と同じ扱いをして欲しいということで個別に要求されていましたが、けんもほろろに扱われてきたのです。日本の政府は分断政策をとりまして、在米や在ブラジルの人達が来ると「あなた達にはほんとうはあげたいのだけれど、何しろ韓国人

の被爆者が沢山いるからね」ということで、韓国のせいにして。それから今度は、「日本の被団協(日本人の被爆者の団体)は、あれは赤だからあそこに近づいてはいけませんよ」と。こういう形で皆個々バラバラだったのがこれではもうどうしようもないということで、共同行動をとられるようになったのです。それで、その在米と在ブラジル、在韓の代表者の方たちが初めて一つに、一堂に会われて握手をなされた場面にもちよどわたくしも居合わせたのですが、非常に感慨深いものがありました。そしてそういう国境を越えた形での共同行動、それぞれ個別に言えばいろいろ言うことが違うわけですが、でもほんとうに大きなことで一致してとられたということで、様々な勝利を得られてきたのではないかと思います。これはいろいろな意味で参考になるのではないかという気がしております。

現在の日本の状況は、とにかくもう皆さまご存じのように一番たくさん、一万発以上の大量破壊兵器を持っているアメリカ、ロシアの両方がお互いに「テロと戦う」という妙な敵をこしらえて、そしてどんどん戦争を行っていく。それこそ大量殺人を行い続けていてガンガン使っているわけですが、そのアメリカにまた日本がびったりとくっついて。武器産業のためには敵が必要だから、とにかく常に敵が必要なんです。日本の場合とはとにかく北朝鮮というのを「これが敵だ」と飛びついて、もうものすごい大宣伝を行って、そして憲法改正まで目論んでいるようですけど。久間旧防衛相の「しようがない」という発言(〇七年六月三十日、久間防衛相は米国による原爆投下について「長崎に落とされ悲惨な目に遭ったが、あれで戦争が終わったんだという頭の整理で、しょうがないな」と思っている。それに対して米国を恨むつもりはない」と発言・編集部注)は、日本政府全体の正直な気持ちを暴露したものだというふうに思われます。

何だかちょっと詩とは離れたようですが、あまり離れてもいないとも思うのですが、拙い話をしてみました。お許しくださいませ。(一同拍手)

長津功三郎 石川さん、どうもありがとうございました。

それでは、プログラムに従いまして進めていきたいと思えます。京都からお越しいただいて、昨年と今年と生活話の詩集をお纏めになりました。現在もまたコールサックの鈴木さんと一緒に皆さんのお手許に趣意書が配られておりますが皆さんに呼び掛けてそういう詩集を作ろうということでございます。有馬さん、よろしく願いいたします。

有馬 有馬(ありまたかし)

今朝、京都からやって来ました。前月十月二十五日から二十九日までわたくしはインドのニューデリーにあるネール大学に行っておりました。日本のヒンディー学者とインドの日本語を勉強しているデリー大学の大学院生と一緒にゼミナールというような形で、このような教室で日本文学について会議をしました。日本から行った有名なヒンディー学者とか古典の和歌をやっておられる方、あるいは近代日本文学をやっておられる方、大学の名誉教授といった方々の中に肩書の無い一介の日本の詩人ということで呼ばれて行って来ました。

そこでありました中で、日本の学者さんが日本の文化・文学をご紹介される時には古典の和歌、あるいは近代文学の石川啄木あるいは宮沢賢治、与謝野晶子、樋口一葉、いろいろなことを教えておられるようですが、戦後の文学については、インドではあまり日本文学を勉強されている方はご存じありません。わたくしもこの十年間余りあちらこちらを野良犬のようにうろついてまいりましたが、日本の詩と言えませんが、「俳句」です。その次に「短歌」です。コンテンポラリー・ポエトリーの「現代詩」というのはほとんど知られておりません。それで、このゼミナールで宮沢賢治とか石川啄木とかを日本の学者がいろいろとデリー大学の日本語を学ぶ大学院生にコメントをされておる中で、あるネール大学の先生がレポートを出した時に、ひと言「峠三吉や原民喜が原爆の落ちた詩集を出している」と話しました。わたくしは戦後文学についてそのように話されたインドの先生に「ことし日本では『原爆詩一八一人集』出しましたが、ご存じですか？」と質問しましたところ、その先生は「知っております」と答えました。「なぜですか」と訊くと、「インターネットでそういうインフォメーションを私は検索いたしました」ということであります。話せば長ですが、この『原爆詩一八一人集』をインドのその先生が知

っておられたということで、その会議のあといろいろと話をいたしました。

わたくしの思いますのは、こんど『原爆詩一八一人集』が出たあと、その英訳をそこにおられる郡山先生はじめいろいろ尽力いただいておりますが、英訳と同時に世界の各国で日本語を勉強している人達にこの『原爆詩一八一人集』を知ってもらうことをしたらどうか。というのは現在、世界で日本語を学んでいる人はおよそ三百万人いるといわれます。すると、この一冊をその中の人に読んでいただくことによって日本語のニュアンスを直接知ってもらうことができるのではないか。ひと口に英語というのは、それは世界の共通語になっていますが、それとともにわたくしはそれが出版された後、例えばその原作者が外国に行ってその詩を英語なり日本語で読む。日本語でしかできない方はトランスレーターをつけてその国の言葉、例えばスペインの言葉なりロシア語なりをやるという「行動」が必要ではないかと思います。今までの日本の詩人は、書いて、郵便局に送って、出版して、詩集を出して、あるいは出版記念会、ということで満足していたかも知れません。わたくしもインドの学生達と話をする時は日本語で話したり下手な英語で話したりいたしますが、その原作者が英語は下手でも現場へ行って、それを読むとかいうコミュニケーションを英訳と同時にやればいかがかなと思います。特に最近の若い方は、英語は僕なんかよりはるかに上手ですから、そういう個人的な形でこの『原爆詩一八一人集』をさらに広げていくことが重要ではないかと思います。その意味で近く英訳詩集が出ることはうれしいことです。

そのように考えながら十一月月上旬、わたくしはある用事で久しぶりに広島へ行きました。あそこには京都からの古い市電が走っておりますね。わたくしがこの『原爆詩一八一人集』に発表いたしました「ヒロシマの鳩」という作品の中には「祇園」「西陣」「銀閣寺」という行き先を書いております。それが今やはり広島市内に走っているだろうかという関心をもって見ましたところ、元気に走っております。ただ、昔は「銀閣寺道」とわたくしが学生時代に行き先を書かれていたものが、「銀閣」としか書いてなかった。というのは、もうリフォームして愛称として行き先をぶら下げる、ぶら下がっている。しかし車体自体は京都市電のものでした。そしてまた、平和公園の鳩の数が最近では以前よりは少なくなったのではないでしょう。さらに、あの相生橋のそばにある鈴木三重吉の銅像のそばには枝垂れ柳が前はございましたが、それがこんど行った時には、相生橋はもう二十年数前一九八三年に新しくされておりますが、鈴木三重吉のその枝垂れ柳が無くなっている。そしてデジカメ、やケイタイの人達が原爆ドームを取り巻いているという状況でありました。その時わたくしが思いましたのは、ひと口に「過去の広島原爆の悲しみ」というところから、今後は「現在形の広島」「原爆が落ちた広島」から「未来形の広島」、それは世界に核兵器を使用するイラクあるいは各国でウランウム、そういうものを使用する戦争の悪への詩人の眼が必要ではないかということです。そのあと、平和記念資料館を訪れましたところ、その記念品コーナーに、この『原爆詩一八一人集』が展示されているのを見つけて、その認識をあらたにして帰ってきたばかりです。

あまり大袈裟なことは申せませんが、今日全国から来られた方々はそういう現在、未来形の想いをそれぞれこのアンソロジーの作品に発表されたのではないかと思います。

もっとお話したいのですが、最後に、私が発表しました「ヒロシマの鳩」を読ませていただきたいと思います。

ヒロシマの鳩

クウ、クウ、クウ

空、空、空、空、空

屋前の広場から

いつせいに飛び立った鳩の群れが

元安川の上をゆっくり旋回する

かがやく噴水よ もっと高く

真夏の空にまっすぐ吹きあがれ

蒸れるそよ風よ もっと生ぬるく

よどむ川端から強く吹きつけよ  
相生橋のほとりの  
鈴木三重吉の碑にそよぎかかる  
しだれ柳の前にたたずむとき  
崩れかかるドームの  
かたむく残骸よりも斜めに  
慟哭している おびたしい死者たちの  
短い影

おお 幻か  
かけろうが燃える向こうから  
身動きしない人間たちを積んで  
京都の地名をつけた中古の電車が走ってくる  
「祇園」「西陣」「銀閣寺」……  
その上を横切って  
本川へ舞いもどるひと群れの鳩よ  
張りつめた青い空にむけて  
近くの球場から聞こえる  
大歓声よりも高く鳴け  
苦、苦、苦、苦、苦  
クウ、クウ、クウ

(『原爆詩一八一人集』91頁)

長津功三良 感動的なお話と朗読、ありがとうございました。

一応皆さんは「先生」ですが、敬称はすべて「さん」付けでやらせていただきます。ご了解ください。

長谷川龍生さんもおっしゃいましたが、フランス語とかスペイン語、英語だけではなくもっと翻訳せよというお話もありました。以前十年前に浜田知章さんが広島に見えた時に、「広島から広島の哲学を発信せよ」ということを強く教えていただいた記憶があります。印象に残っております。その頃からちょうど鈴木さんとお繋がりできて、今回このような本をご一緒にさせていただくことができたのですが、今も有馬さんから「詩人よ、広告せよ」というような意味のお言葉を頂いて、我々も大いにこれから頑張っていかなければいけないと思います

次は、今回の『英語版』を間もなく、クリスマスまでには出したいということでだいぶ馬力をかけていただいたのですが、翻訳を中心になって担当していただきました郡山直さんにお言葉を頂きたいと思えます。他にも水崎野里子さん、結城文さん、大山真善美さんたちに翻訳はお手伝いいただいております。

郡山直(こおりやま なおし)

私はこの東洋大学に昭和三十六年から三十六年間、つまり一九六一年から九七年まで勤めておりました。今日はまた皆さん方のこの集まりにこの場所を提供することができて、嬉しく思います。

私は、鹿児島県奄美諸島の喜界島という島で生まれました。鹿児島師範学校に私は昭和十六年四月に入ったのですが、十二月にはもう大東亜戦争が始まりました。最初の年は英語三時間、二年生になったら二時間、三年生になったらもう無くなったのではなかったかな？ 英語排斥の時代でしたから。

それで、一九四五年に戦争が終わりまして確か次の年、四六年から奄美地方は鹿児島県から切り離されて沖縄の軍政府が支配したのです。その関係で本土には来られない。もう仕方なく沖縄へ行きまして、沖縄で外国語学校を六カ月で出て、それから向こうの嘉手納基地で通訳をしたり、軍政府で翻訳などをしました。ちょうど琉球弧といいますが奄美・沖縄・宮古諸島・八重山諸島の島々から一九五〇年に留学生五十二名がアメリカに派遣されました。試験を受けてパスして行ったのですが。

それで\_話したいことがいっぱいあってどれを話そうか困っていますが、二十八名がニューメキシコ州のニューメキシコ大学に送られました。私はそのうちの一人です。ニューメキシコ州といいますと、今度の原子爆弾が研究され実際に実験が行われたのもニューメキシコです。ニューメキシコ州のロス・アラモスLos Alamosに原子爆弾の研究所があり、盛んにそこで研究されてニューメキシコ州の砂漠で実験されたのです。その模様が浜田知章さんの詩(「太陽を射たもの」)の冒頭に引用されています。

それで私は、そのニューメキシコ大学の一年生に入ってどんな授業を取ろうか散々迷ってから、英語は必ず取らないといけなかったので英語、それと自然科学のchemistry、それからanthropology(人類学)、それから心理学をごちゃ混ぜに取ったのですが。その時に取ったchemistryの教科書を私はここに持って来ました。(教科書を提示しながら)この後ろの方を見ますと、ちゃんとペンで書いてあるんですね、「一九五〇年九月十五日／ニューメキシコ大学の書店で買った」と。テキストの前の方にはchemistryの授業を持ってくださったステフェンという先生の名前とか\_講義は一年生が大体二百名くらいいましたね。それで階段教室になっている\_私の座席は前の方の三列目の五番目だと席まで書いてあります。この授業を取って非常に良かったと思うのは、湯川秀樹博士の「原子力と人間」の詩を訳すのに非常に役立ったのです。大学で受けた授業でこんなに身に染みて役立ったと思うのは一つしかない。ほかはどんな授業を取ってももうほとんど忘れてしまっている、残っていません。それでこれは全体で五百頁くらいある本ですが、三百八十二頁の訳をさっと紹介します。三行余りでちょっと広島のことを書いてあります。

《一九四八年八月の早い頃、今までに無かったものすごい爆発力をもった原子爆弾が広島という日本の都市に投下された。その数日後、日本との戦争は終わった》\_こう書いてあります。

『一八一人集』を訳しているうちにいろいろな事が起きるんですね。私は私の今日のこの話に題を付けるとしますと、「翻訳者の泣き所と喜び」と付けたいのです。「泣き所」はやはり私の語彙。日本語の力よりもはるかに語彙の豊富な人達が独特の感性で独特の文体で書いてある。時々意味が取りにくいのがあります。それを訳すのは非常に骨が折れる。生きていらっしゃる方には二、三人電話を掛けて質問をしたことがあります。亡くなっている方はもう電話の掛けようもなく、どうしたかというところと散々一人生命こういう意味だろうと思ってやりました。中には割と訳しやすく「ああ、上手くいったぞ!」という満足感を感じる時があります。それは翻訳者のよろこびですね。「いやあ、これは原作よりも確かに良い」(一同笑い)などと思ったこともあるのです。いろいろな苦労もあり喜びもある、その一端を私は話しています。

英語では、つまり韻、音を揃えることが非常に大事になるのです。では、どれくらいにやったらいいのか。なるべく韻を踏ませたいところは踏ませたい。なるべく頭韻alliterationも使えるところは使った方が良さだろーと思いました。一つの例を紹介すると、大崎二郎さんの詩「笑い 三つ」(一六五頁・下段三行目)に「冷水でゴシゴシ顔を洗った」| | この「ゴシゴシ洗った」というイメージをどうしたらいいか。「念を入れて」とすればcarefullyでもいいし、「力強く」ならbrisklyでもいい。ところが、「こする」「洗う」という時にscrubという単語がありますね? これはその前にどんな副詞句を付けたらいいかと思って、ふと思いついたのが「念入りに」というscrupulouslyです。それでscrubと頭を合わせてみたのです。これはただ私が勝手にやったことなのですが。時々そういうテクニクも入れられたら入れてみようと思いました。

それからリズムの面で日本語と英語の違いは、英語はタッタッタッタとリズムが確かに良いのです。日本では平坦に聞こえる文章も、英語ではサツ、サツ、サツ、サツ。これは日本語と英語のはっきりした違いだと思います。日本語も非常にきれいな良い言葉ですよ。

一六九頁の沖長ルミ子さんの「振り向くと」という詩がある。この最後の四行目「歩いて 歩いて わたしを探して／歩いて 歩いて わたしを見つけて／歩いて 歩いて わたしの名を呼んで／生きて 生きて わたしたちの地球を助けて」これを訳しているうちに、「ウン、うまいリズムができるぞ。強・弱、強・弱になりそうだ」。それでちょっと鉢巻を締めて袖を捲り上げてやったのです。

《 Walk and walk and look for me／Walk and walk and find me out／Walk and walk and call my

name/Live and live and save our earth 》

\_\_というふうに出て来ました。それで、それも二行目はWalk and walk and find meで終わっているのです。いや何か物足りないと思ってoutを最後に付けたら、Walk and walk and find me out。ピシャっといったのです。これは、まあそう言っちは原作者の沖長さんには申し訳ないけれども、この響きにおいてはこの訳は外人が読んだ時に「ああ、いいなあ」と思うのではないかと思います。(一同笑い・拍手)……どうも、法螺を吹いてすみません。

飽くまでも私たち英訳者は日本人ですから、ちょっと外国人の協力者に見てもらって一応コミュニケーションを密にしてやりました。そうするとグッと良くなる場合があるのですね。日本語式の表現が「こういうのはあまりアメリカではこんな表現はしない」「こう書いた方が良かったら」と。それは非常に参考にさせてもらい、訳文ができました。

皆さんお手持ちの編集者からのことば(『原爆詩集一八一人集』英語版ご挨拶)の原本を頂いて私なりに訳し、ネイティブ・チェッカーに見てもらって話し合いました。例えば「ヒロシマの哲学」はそのままにするとPhilosophy of Hiroshimaですが、そう訳したところが、私の協力者がこれではちょっと解りにくいから「ヒロシマの悲劇から生まれた哲学」としたらどうかとPhilosophy rising from the tragedy of Hiroshimaとやったのです。また私は解り易いと感心しながらそれを参考にさせてもらいました。

もう終わりたいのですけれども、あと四、五分……良いでしょうか？ アメリカでこんなことがありました。| | アインシュタインがちょうど相対性理論を発表して非常に有名になった。彼は運転手つきの車であちこちの大学で講演して回った。そうするとある日、その運転手が運転しながら「アインシュタイン先生、もう僕は先生の話をお三回聴いた。だからもう私にも先生の講義はできますよ」と言った。するとアインシュタインが何て言ったか？「そうか、では君にチャンスをおあげよう。今度行く学校はまだ僕の顔を見ていないから、君は向こうへ行ったらちゃんとアインシュタインになり済ませ。僕は君の運転手の帽子を被って隅に座っているから」。それで運転手はもう完璧な講義をして、「ではこれで終わります」と帰ろうとした。そうすると中から「アインシュタイン先生、質問。先生が言ったこのところが分からない」と言って高等数学の数式を持ち出してきそうになった。もう運転手は困ったなと思ったが、機転を利かして「いやあ、あんたの今の質問は実に簡単な答えになる。僕はちょっとがっかりしている。それがどれだけ簡単か、僕の運転手がそこにいるから彼に来て説明してもらおう」と言ったわけです。(一同笑い)これはなかなか面白いと思う。私はもう六十年くらい英語を勉強したけど、いろいろ小話などいっぱいあったけどこれは一番気に入っている。

では、私の話はこれで終わります。(一同拍手)

長津功三良 ありがとうございます。翻訳者としてのご苦労も大変だったと思うのですが、間もなく立派な本ができます。

ちょうど翻訳の話が出ましたので皆さんにお伝えしますが、『一八一人集』にご参加いただいた皆さんの英訳がありますから、一枚ずつ自分の篇だけお持ち帰りになり、今の英訳スタッフでどのように自分の詩が解釈され翻訳されているかということをご参考にして下さい。

それでは続きまして、大阪からお越しいただいています方言詩の大変ご高名な方ですが島田陽子さん、ご挨拶をよろしく願いいたします。

島田陽子(しまだ ようこ)

こんにちは。ほんとうに楽しくてためになるお話をたっぷり聴かせていただきました後でわたくしのしょうもないお話など短い方がよろしいと思います。今日わたくしがこのような高い所に出させていただく力は全く無くてほんとうに申し訳ないのですが、どういわけかお約束してしまいました。

わたくしは皆さまと違っていて、今まで原爆詩は一篇も書いてないのです。反戦・反核の詩というのはそれとなく分かるようにとか、あるいは生のままとか、言葉あそびとか、子ども用とか、いろいろ書いているのですが、広島と向き合った原爆詩というのは一篇も書けなかったのです。と申すのは、自分が被爆者でもありませんし被爆者の身内も持ってありません。しかも想像力の貧しいわたくしがとてもそういう詩は書けない。わたくしが書かなくてもたくさん詩人達が素晴らしい作品を書

いていらっしやるから、もうそれはわたくしが代弁して欲しいようなことを書いていらっしやるから、わたくしが何も書く必要はないというふうな変な満足感がございまして、書いて来なかったのです。

ところが今回鈴木さんの方から声をかけていただきました時に、もう自分は一生書かないだろうと思っていたのにふっと気が迷いまして、やはり自分も書いてみようかなあと、詩人の末席におる者としてせめて一篇ちゃんと広島と向き合った詩を書くべきではないか、たとえ貧しくても拙くても\_という思いになりました。その基にありますのは、わたくしは一昨年暮に癌を手術いたしまして、隣臓ですからちょっと再発がどうのこうのと脅かされているのですけれども、毎月診察を受けて数値を計って、あるいはCTを撮ったり、何かしょっちゅう検査ばかりさせられておりまして、再発を予防しながらいま小康を保って動ける間は動きたいと思ってやっているのです。癌というのは不思議な病気で、今こうして元気になっているし大した兆候が出ていないから快癒したのか全快したのかというところでもなさそうなので、「癌が治った」というのはどこで言えるのか分からないのですが、そのような状況がございましたので、やはり一篇ぐらい書きたい。しかも諺に「いつまでもあると思うな親の恩」という言葉がございしますね？ それと同じで「いつまでもあると思うなわが命」というような感じになりまして、一篇ともかく書いてみようと思って、やっと締め切りに間に合った貧しい拙い詩を載せさせていただきます。

私は現在詩を書き始めた人達のグループに幾つか助言者として関わっております。わたくしの方言とか大阪弁の詩についての講演などを聴いてくださった後で、自然にその主婦達を中心に自主的に詩を書くグループが出来ていくのです。その結果、月一回わたくしが行くことで書きたいと思っている人が書けるようになるのならお手伝いしましょうということで、そういうグループに関わっています。

このたび『一八一人集』を皆さんに紹介しました。それまでもわたくしは自分が関わっている本は全て紹介して、本屋さんにわざわざ行って買わない人でも、わたくしが紹介することによって手に入れて読んでもらえるお手伝いができると思ってやってきたのですが、今回『一八一人集』を紹介した時はびっくりしました。もうほとんど九〇%の人が「欲しい」「読みたい」と言ってくれたのです。今まではわたくしが紹介しましても半分ほどでしたのに、今回は九〇%の人が欲しいということで、わたくしは運び屋をして教室へ持って行くために重たい思いはしましたけれども、とっても嬉しかったですね。今度の本を皆が喜んで読んでくれましたから、そして今度の本は構成が良かったというのでしょうか、年代別になっていますし、古典的なものも全部載っていますし、貴重な資料としても一冊そばへ置いておきたいという本に出来ていると思うのです。ですからご紹介するという立場の喜び、先ほどは「翻訳する喜び」とおっしゃっていましたが、わたくしは「紹介する喜び」というものをこのたびよく分かりました。

そういうことで、今までお話しなさいました視野の広い海外まで及ぶお話と比べまして、わたくしは日常の生活に足をつけての小さな活動しかできませんけれど、そういうこともやはり一つの必要なことではないか。つまりわたくしは、詩の底辺を広げたいという思いがあるのです。詩の底辺を広げるといことは、わかりやすい詩を書いたら良いということではなく、分かりやすくても奥のあるそういう詩を書く人達を育てたい。「育てたい」と言うとおこがましいのですが、そのお手伝いができたらと思います。この間の「続・現代日本生活語詩集」もその人たちに呼び掛けたら、やはり各地から来ている人がいて、長崎の人も長崎弁で原爆詩を書いてくれましたたくさんの人が参加しました。その人達はアンソロジーに参加したことで、ハードの表紙の立派な本の中に初めて自分の詩が活字で載っているとあって、喜んでいました。ですから、詩を書き始めた人達はそういうところから喜びを知って、そして詩を書くということをずっと生涯続けてくださるだろうと思います。わたくしはちょっとしたお手伝いを、詩の入り口の所でできたらいいなということでやっております。今回はほんとうに良い本を作って下さいました鈴木さん達のお陰で、原爆詩集がたくさんの人に渡りました。「良い本を作ってください」ということに対してお礼を申し上げます。

英訳も楽しみですが、私自身は英語は女学校一、二年の力しかなく読めませんので残念なのです。と言いますのは、戦中の動員学徒、女学校の三、四年生の時、工場で働いてきた年代でございますので。しかも大阪大空襲、昭和二十年の六月七日にその工場街が全部狙われてやられたのです。そこへ来ていた中学生も女学生も、わたくしの女学校でも六人亡くなりましたし他の中学生もたく

さん亡くなったんですね。そういう経験はしていますので、反戦・反核というのはもう身に付いた生活感情みたいなもので、思想というより「もう嫌だ」という思いはつよいのでそういうことは書けるのですが、「原爆」というもの、「広島」というものはやはり体験しないと私には書けない、私は貧しい力しか持っていないということをいつも思っていましたのに、今回は参加させていただいて良かったなあという思っております。この一冊をわたくしも読者として手に取った時にもし自分の作品がそこに無かったら、ずいぶん寂しかったらと思います。参加させてもらって喜んでいてということもお伝えして、今日はこれだけのお話をさせていただきました。(一同拍手)

長津功三良 島田さん、どうもありがとうございます。生活者としての視座からのお話で、やはりしっかりこれからも考えてやっていかなければいけないと思いました。

挨拶の筆頭に御庄博実という名前が載っていますが、ちょっとご紹介します。今日はお身体の具合が悪くて来られませんでした、広島で活躍しております。もうご高齢で、戦後にかなり大きな雑誌でありました「列島」の元編集同人でもありました。昭和二十六年に反戦詩的なものを書いて、日本で唯一米軍の政令一二五号違反ということで逮捕された人でございます。その人がこの原爆詩集の序文を書いています。体調を崩されて、数日前までは一緒に東京へ行くという約束だったのですがどうしても微熱が取れない、勤弁してくれということでメッセージを預かっておりますので、読ませていただきます。

御庄博実(みしよう ひろみ)

『原爆詩一八一人集』出版記念会へ(代読)

《六十二年前の夏、広島・長崎に投下された原爆で第二次世界大戦は終わりました。「核時代の幕開け」と呼ばれて、二十世紀最大の歴史的事実とされています。

無差別・大量殺戮という戦争は、ヒトラーによるスペインの都市ゲルニカの無差別爆撃で始まりました。大量殺戮の兵器は毒ガス、細菌兵器などをこえて原爆につながりました。今日では一発で広島型原爆の千倍の威力をもつ水爆など、米・ソそれぞれ数万発がボタンを押せば発射できる状態で世界を取り巻いています。

このような世界的状況のなかで、国境を越えた一八一人の詩人の「反原爆」の詩集が一冊にまとめられた意義は、歴史的であると思います。一人の被爆者として、また詩人として、編集を主導された長津功三良、山本十四尾両氏に尽くせぬ謝意を述べるとともに、この困難な出版を進んで引き受けられ、自らも詩人として参加されたコールサック社の鈴木比佐雄氏に感謝します。

私は本日の出版記念会に出席する予定でしたが、数日来体調を崩して参加できなくなったことをお詫びいたします。そして、この記念会の盛大なことを祈って、広島からご挨拶をおくります。

二〇〇七年十一月十七日 御庄博実》

## 第二部 参加詩人のスピーチ・朗読

山本十四尾 それでは、これから第二部に入ります。

先ほど翻訳者と長谷川龍生さんの方からも話があったように、かつてわたくしが広島の大学に講演に行った時に、原爆資料館へ長津さんと一緒に行って唖然とした事実が一つあるのです。当時広島県の詩人協会の事務局長をやっていた伊藤眞理子さんと会食する機会があってその時にもお話ししたのですけれども、広島原爆資料館の所にあるのは峠三吉の文庫本など一冊二冊置いてあるだけだった。それを見て来て伊藤眞理子さんに「アンソロジーくらいは置いてもらうように交渉してくださいよ」と言って、…(会場の伊藤氏に向かって)「その後言っていたいたんですよね？」と問いかけ)…それから置かれるようになったかどうかは分かりませんが、いま池山吉彬さんに長崎の資料館のことを聞いたら、そちらの方にはちゃんと置かれているということなので、できますればこの『英訳版』が出た段階で日本語版と一緒に並べていただいて、それで外人さんが来た時に関心を持って読んでいただく。そこから我々の行動がスタートしたいと思うのです。いわゆる原爆資料館にこの『英訳版』が置かれることによって、まず我々が世界に眼を向ける第一弾としていきたいと考えていますの

で、また長崎・広島の地元の詩人達にもお力添えを是非お願いしておきたいと思います。

さて、第二部を司会する大掛さんにバトンタッチいたします。

司会・大掛史子(おおがけ ふみこ) 第二部を始めさせていただきます。時間がずれこみしましたので少しきつくなと思いますが、だいたいお一人五分くらいの感じでスピーチと朗読の方をお願いいたします。

最初に日高てるさん。日高さんは一九二〇年生まれという方で大変ご高齢でいらっしゃるのですが、たいへん全国的に活躍をなさっている方です。奈良県にお生まれになりまして、現在奈良の大和高田市にお住まいでいらっしゃいます。今日は奈良からわざわざいらっやってきました。長津功三良さんが「奈良のお母さん」と呼んで慕っています。詩集は『日高てる全詩集』『今晚は美しゅうございます』がございまして、「歷程」「火牛」の同人、「日本現代詩人会」の会員でいらっしゃいます。日高さん、お願いいたします。

日高てる(ひだか てる)

まず初めに、この『原爆詩一八一人集』をコールサック社の鈴木比佐雄さん、長津功三良さん、それから長谷川龍生氏、それから今日ここで郡山直さんの翻訳のユニークなお話もお聞きして、ありがとうございました。こうして出させていただく方がいないと、どうにもなりません。よくお出しくださいませありがとうございます。

私はテレビは見たいものだけ見ますけれど、ラジオはずっとかけ放して聴いていたの。八月四日に。長津さんと鈴木さんの声がNHKラジオから聞こえてきた。あっ！ と思ってびっくりしたのです。詩人というものは密かに詩を書いているものですが、こんなに時宜を得たこういう発表して下さる。「凄いなあ！」と思って、もう感動しました。原爆が落ちたそれが「ブラックのパンに見えた」というのがかつての右原庵の命名なのです。「ブラックパン」というもの。それで、詩誌「ブラックパン」表4に全面広告しますと言ってそれから私は原爆詩集をあちこち配って「皆読んでください」と言っているわけなのです。

私はささやかですが、大和高田市が一九九〇年ごろ、奈良新聞にもでていますが、「非核宣言都市」という催しをずっとやっていて、そこに関わりを持っています。私は応援しますと言って文化協会高田の詩の教室の人と一緒に私の「水ヲクダサイ」を読んで、会場を盛り上げてきました。それが今日配りましたここ(配布資料・「平和の尊さへ熱い祈り」=一九九〇年八月五日付奈良新聞コピー)にあります。七年にもなろうとしておりますのでもう消えかけています。これは大和高田市の県広域地場産業振興センターという所でやりまして、それで日高てるが作った反核の詩「水ヲクダサイ」を、参加した約千二百人の市民と日高てると一緒に読んで読んだということで。この記事によりまして、《日高てるは昭和二十四年に発表した第一詩集『めきしこの葎(しべ)』により「日本のランボー」といわれた》という、えらいお褒めの言葉を寺田透氏に頂いております。そのようなことで、ここで一丸となって小学生にいろいろな作文を書いてもらってそれを発表して、それから市民の皆が集まって一緒に一つの部屋を「原爆反対」という言葉の垣根にしたわけなのです。そんなことが載っていますからまたお読みください。

私はもうかなりお婆さんですが、「水ヲクダサイ」は東京でも読みましたし、私はエジンバラへ演劇祭に行って来て向こうでも読んできましたね。というのは、今ここにおられる福武京子という人が私の詩の教室と一緒に勉強しているのです。私がいちばん心の休まる場所はそこなのです。詩の人達は皆想いが一つでございますから。それで、大阪に「生活と文学の会」といって夏休みに高校の先生や中学の先生が講習をなさるのです。その方が「日高さん、朗読に来てください。草野心平の詩でも小野十三郎の詩でもよろしいから」と。そしてついでに言われることは、私は黒ばかり着てますからね、「黒い怪鳥が舞い下りたような黒で来てください」|| こう言うのです。それでその日も黒で行ったのです。それでその前に、私の詩の教室ではとにかく「凝る」ということはよくやるのです。三分間スピーチでどれだけ話ができるかとか。そうしたら福武さんは、英語を途中で使われたのです。それで面白いから「あんた、英語で詩を書きなさい」と言ったの。それで英語で詩を書いたというものが

私の「水ヲクダサイ」を翻訳してきたの。いつでも一緒に机を並べているのに、涙が流れてしょうがなかった。それを今日はご披露いたします。そういうことでございます。そしたら福武さん、よろしく願いします。この詩でたくさんの朗読をしました。今日は福武さんと一緒にやります。

「水ヲクダサイ」日高てる氏・福武京子氏による和・英デュエット

(『一ハ一人集』242頁)

水ヲクダサイ

??原爆記念日朗読ノタメニ

水ヲ クダサイ

光ヲ クダサイ

声ヲ

言葉ヲ クダサイ

黙ッテ死ンデイッタ人タチガ

鎮カニ 眠ルタメニ

ヒロシマノ原爆ニ ヤラレタ人タチハ

ソノ人タチハ

黙ッテ 死ンデイッタ

生命ヲ クダサイ ト 何故言エナカッタノカ

何故 言ワナカッタノカ

一九四五年 八月六日

投爆下ノ 男モ女モ老人モ青年モ学生モ赤ン坊モ

スベテ死ンダ

犬ヤ猫ヤ小鳥ヤ草樹タチモ スベテ死ンダ

大地ガ死ンダ

シカシ 今モ生キナガラ死ンデイル人々ガイル

ソノ死ノ生

ソノトキ ソレラノ生アルモノタチハ 死ニ頻シテイタカラ カ

ソレトモ スデニ 死ンデシマッテイタカラ

〈クダサイ〉ト 言エナカッタノカ

ソウデハ ナイ

ソウデハ ナイ

〈クダサイ〉

朝ノ夜明ケニ向ケテ

腕ヲ ノバシ

光ヲ クダサイ

人間ガ 人間トシテ 生キテユクタメニ

声ヲ

言葉ヲ

ソシテ

命ヲ クダサイ ト

シンジツ 叫ボウ

今 生キテイル人々ヨ

〈水ヲ クダサイ〉

トモ 言エナイデ 死ンデイッタ人々ガ

鎮カニ

眠ル タメニ

水ヲ クダサイ

光ヲ クダサイ

声ヲ

言葉ヲ クダサイ

ソシテ

命ヲ クダサイ ト

GIVE ME WATER

--For the Recitation on Atomic Bomb Memorial Day--

Give me water

Give me light

Give me voices

Give me words

in order that those who died silently

are able to sleep calmly.

Those who were atomic bombed in Hiroshima

Those people

who died silently

Why couldn't they say "Please give me life" ?

Why didn't say so?

August 6th 1945

By atomic bomb, men, women, elderly, youth, students, babies

All died

Dogs, cats, birds, grass and trees, all died

The ground died

but there were those who are living, but died,

That life of death

At that time, as were those who were living

at the point of death?

Or as they were they already dead, couldn't they say

"Give me water" ?

Nay, it wasn't

Nay, it wasn't.

"Give me"

Toward dawn

Stretching arms

Give me light

In order that mankind can live as mankind

Give me

Voices,  
Words and  
Life:  
Let us truly shout,  
all of us people who are now living!

In order that those who died  
without even crying  
“Give me water”  
are able to sleep calmly.

Give me water  
Give me light  
Give me voices  
Words and  
Life.

大掛史子 貴重な力強いデュエットを、ほんとうにありがとうございました。日高さん、これからもますますお元気で活躍くださいますように。

次は上田由美子さん、お願いいたします。

上田さんは広島県にお生まれになって、広島市在住です。詩画集『「白い闇」上田由美子作品集』がごございます。広島ペンクラブの会「ペン誌」に所属していらっしゃいまして、「竜骨」の同人でいらっしゃいます。今日お読みいただくのは、二十部ほど作ってくださった「原爆ドーム」という詩をお読みくださいます。資料の中に上田さんの「原爆ドームの略歴」をお配りしてありますので、それに基づいた詩をお読みくださるということです。

上田由美子(うへだ ゆみこ)

大変ご高名な先生の後に高い所に立ちますのはとても恐縮なのですが、お許しくださいませ。本日は『原爆詩一八一人集』がご縁で皆さまにお会いすることができ、とても嬉しく思っています。

今日、私は『一八一人詩集』の中の詩ではなく、広島から来たということでこの日のために「原爆ドーム」に焦点を当てて詩を書きました。

ただ今、会場で皆さまにお読みいただこうと、「原爆ドームの略歴」と題しましたものをお渡しいたしました。皆さまは、きっと鉄骨がむき出しになった今の原爆ドームのあのイメージしか浮かんでこない人も多いのではないのでしょうか。そう思って、被爆する前の姿を「略歴」の中に書いてみました。どうぞお読みになっていただければ幸いです。

わたくしは長い間、原爆のことは口にいたしませんでした。ですから私の周りの、ほんとうにごく周りの人しかわたくしが被爆手帳を持っているということを知っている人はなかったのですが、ある時私は次のような詩に出会いました。

ひろしまの追憶は  
世界の追憶であれ  
ひろしまの嘆きは  
世界の嘆きであれ  
天地のくだける日の苦しみを  
告ぐることなく  
わが友はここに眠る

と書かれた広島電通職員の慰霊碑の詩を知った時でした。

あの日を知っているのは私。私には沈黙は許されない。沈黙していることは忘却につながるのだと思ったのです。忘却することは、過ちを繰り返すことだと。そう思いだした頃から私は原爆詩を書こうという気持ちになりました。

今年の八月六日、秋葉広島市長の「平和宣言」の中に、先ほどもお話がありました「広島哲学」という言葉が出てきました。これは詩人浜田知章さんのお言葉として鈴木比佐雄さんが『一八一人集』に書かれていたお言葉を引用されたものだと思います。

私はこの詩集ができた時に、最も読んでいただきたいのは広島市長さんだと思います。それで、奥様をちょっと知っていましたので訪ねて行って市長の奥様に直接手渡し、「必ずご主人にこの詩を読んでもらってくださいね」とお願いしました。なぜかといいますと、市長のところには山のように「謹呈」という詩が行くのだそうです。それでも読み切れないのずっと積み上げてあるだけだということを目にしていたので、これは奥様に渡したら絶対に読んでもらえると思いました。それで、市長のスピーチの中に「広島哲学」という言葉が出てきました。きっと彼はあの『一八一人集』の詩集を読んでくれ、その言葉を詩の中に見つけたのだと私は今でも確信しております。

原爆で生き残った人々、肉親を失った人々など広島の人、そして日本の人、この恐ろしい兵器の廃絶を願って子や孫や世界に訴え続けていくべき使命を持っています。

『一八一人集』の表紙を飾ってくださった画家であり詩人の福田万里子様は、この本を手になさなく他界されました。そのことはとても残念に思って、心からお悔やみ申し上げます。

私は「一八一人」という呼び名を一八一（いっぱい）として、詩人達の「いっぱい」心のコもった祈りのようなこの詩の数々が、原爆で亡くなられた数十万人の霊のもとに届いていることと信じております。

では、拙い詩ですが「原爆ドーム」を朗読させていただきます。

原爆ドーム

雪が降り続いた朝  
原爆ドームは深々と白で装い  
むきだしていたあばら骨を  
すべて覆い隠し  
天空に静かに抱かれていた

雪が晴れ  
洗い晒しの青空を背景に  
ぽっかり浮かんだ日溜りの中のドーム  
歴史的な風景を超えて  
なぜか悲しみの中で美しい

夏 白雲の群れからのぞく灼熱の光が  
見上げる者たちの目を射る時  
丸いドームの上を  
鳩が直線を描いて横切っていく  
原爆投下 その日を投影して  
ドームの先端は天に向かってうづくまる  
神からの許しを乞うように

吹き抜ける木枯らしが鉄骨を震わし  
照りつける太陽がビリビリと鉄骨に伝わり

錆びた鉄をただれさせながらも  
その形が朽ち果てるまで  
広島の大地に立ち続けるのか

かつては  
広島県物産陳列館として  
緑かかった青銅にふちどられ  
白っぽい石材とモルタルのモダンな建物だった  
洋式庭園には八方から水を吐く噴水の池  
和風庭園には あずまやも作られていた

失ったものの重みに耐えながら  
世界文化遺産として  
大正四年から今日まで  
齢 百年以上が過ぎようとして

【原爆ドームの略歴】 上田由美子

この度、『原爆詩一八一人集』の表紙を飾った原爆ドームに焦点を当ててみました。被爆者である私が一年を通して見ている原爆ドームの姿をご紹介させていただきたいと思います。おそらく多くの方々が被爆した原爆ドームの姿しか心に浮かばないのではないのでしょうか。

平和の象徴として今ある原爆ドームは、かつては物産陳列館以外に美術館としての役割も果たし、大正五年には「昭和美術展覧会」が開かれ全国の新進作家の作品を網羅して美術界に旋風を巻き起こしました。

「洋画協会第一回展覧会」「芸州美術協会」や戦争の深化とともに昭和十二年には「傷病将兵慰問献画展覧会」なども開かれました。川面に映る建物の美しさは、広島の名所のひとつに数えられていました。

芸術文化発展に貢献したこの建物の頭上に、将来核兵器が炸裂すると誰が想像できたでしょう。

「原爆ドーム」という呼び名は、頂上円蓋の残骸が傘状になっている姿から「いつごろからともなく市民の間から誰言うことなく自然に言い出された」と言われています。

このドームについては、記念として残すという考え方と、危険建造物であり被爆の悲惨な思い出につながるということで取り壊すという二つの考え方がありました。

建物の保存か廃止かの議論は、昭和二十三年ごろ始まってから、保存するという結論が出るまでに、延々と十五年以上もかかりました。あらゆる分野の専門家によるさまざまな議論の結果として、原爆ドームは今ある姿で今日まで残されてきたのです。

さらに、原爆ドームを単なる広島への遺跡としてではなく人類共通の平和のシンボルとして恒久的に後世にまで残そうという機運が高まりました。そのための修理費として見積もられた約二億円の内、一億円は市費で、残り一億円は平和を願う世界中の人たちに呼びかけようということになりました。

このために一九八九年から始まった募金活動では、国の内外から次々と善意の寄付が届けられ、当初一億円を設定していた金額をはるかに上回る合計約四億円が集まりました。

いかに多くの人びとが原爆の恐ろしさを心に深く意識しているかが現れています。原爆投下という悲劇が二度とあってはならないものとしての「誓い」が、大きな「祈り」となって世界中に広がったのです。

補修工事は、出入り口のコンクリートの補強、鋼材塗装の塗り替え、レンガ部のひび割れへの樹脂の注入工事、そして最後に自然表面劣化を抑制するために建物全体に透明な防水塗料を吹き付けました。この薄い透明な膜が朝日に、夕日に反射して美しい姿を見せてくれます。ある時は悲しんでいるように見えたり、ある時は祈りに感じられたり、ある時は限りなく無言の抗議をしているように思えたりします。

平和のシンボルを永久保存し、次の世代へと引き継いでいかねばならないと、『原爆詩一八一人集』の表紙を飾った原爆ドームに今、改めて思いをよせています。

\* 参考資料＝被爆四十五周年記念展「物産陳列館から原爆ドームへ」

[追記]

第一回保存工事 昭和四十二年(一九六七年)

第二回保存工事 平成二年(一九九〇年)

第三回保存工事 原爆ドーム世界遺産指定後

平成八年(一九九六年)

平成十五年(二〇〇三年)

大樹史子 どうもありがとうございました。「いっばい心のこもった詩集」 | 大変良いお言葉を頂きました。

次は江口節さん、お願いいたします。

江口さんは戦後生まれの方で、広島県の生まれで神戸市に在住していらっしゃいます。八月七日付の朝日新聞「天声人語」で江口さんの「朝顔」という詩が取り上げられまして、一躍全国的に有名になられた詩人でいらっしゃいます。詩集に『鳴きやまない蝉』『溜めていく』がありまして、「叢生」「多島海」の同人でいらっしゃいます。「日本現代詩人会」「日本詩人クラブ」の会員でいらっしゃいます。

江口節(えぐち せつ)

はじめまして。日高先生や上田さんのように大変な体験をした方の後にお話するのは非常におこがましいような気がするのですが……。おこがましいと言えば、私自身も戦後生まれで広島県の三原市に生まれ育ちましたけれども、広島からは七〇～八〇キロ離れた所ですがやはり体験者に囲まれて育ったという感じなのです。ですから、誰ということなくその人が体験したあるいは救護で惨状を見て来たとかいう人達に囲まれていると、何か自分が原爆に触れて発言するということが非常におこがましいという気持ちで、詩は子供の頃からいつの間にか書いていましたけれども原爆のことを書いたことはありませんでした。ところが十二年前に神戸で大地震が起きまして、私の家は山寄りで震度六で幸い大したことはなかったのですが、震度七の下町の方の酷い惨状に、その近くに一度は住んでいたこともありますし、もう想いがとどめることができなくなって、「一部損壊なのになんでそんなに地震の詩を書くのか」と被害の大きい人達からは思われたりしたこともあったのですが、ともかくその時からずっと地震の詩を書き出しているうちにある時ポロっと原爆に触れることができたのです。その時になぜ触れられたかというのを思い出しますと、それまでは私にとって原爆といっても体験はしてない、どこまでもやはり第三者としてのあるいは政治の詩、あるいは権力者と庶民という、あるいは科学文明と文化とかいう、そういう二項対立の中のどうしても体験してない者の感覚はそこからしか捉えられてなかったのが、地震を経験することによって命、誰もが持っている命の視点から初めて原爆を捉えることができ、地震の詩の中に原爆に触れることができました。

今日お読みする「朝顔」は、そのあとに書いた二番目の原爆の詩です。

朝 顔

紐を渡せば 軒先まで

伸びていく朝顔

散水の滴りが葉に光っている

毎朝 五十も六十も花をつけ

触れると破れそうに薄いはなびら

びらん びらびらん

その蔭から

いつものようにその人は出かけた

いつものように汗を拭きながら

いつもの空に

六千度ものまぶしいはなびらが開くなぞ

知るはずもなかった

破れそうに薄い皮膚があるなぞ

思いもしなかった

川が煮えること

肉が蒸発すること

魂がめくるめくこと なぞ

気づくはずもなかった

そうして帰ってきたのだ

捜す人の張り紙の中に

写真の中に

名を呼ぶ声の消え入る先に

朝顔が燃えた

あの家に

垂れ下がった皮膚の

赤いずるずる??

きょうは 四十三こ

桃色から藤 紫 青紫 紺

朝顔の冷たい色ばかりが燃える

夏

朝の顔が いくつもいくつも

びらびら びらびら

(『一八一人集』162頁)

大掛史子 ありがとうございます。じつは、校正が出ました時に江口さんのお隣の頁にわたくしの詩がありまして、江口さんの詩も一緒に校正させていただいたものですから、何と素晴らしいイメージの詩だろうかとその時から感心しておりました。やはり朝日新聞に取り上げられたので、なるほどと納得いたしました。

次は葛原りょうさん、お願いいたします。

葛原さんは最年少でこの詩集に参加されていらっしゃいます。一九七八年東京生まれ。現在上野の池之端にお住まいで、今日も自転車でごここまで駆けつけてくださいました。詩集に『朝のワーク』。「衣」の同人でいらっしゃいます。NHKのラジオで原爆詩集が取り上げられました時にも朗読をなさいました。そのほかにもいろいろ朗読をラジオでなさっていらっしゃいます。

葛原りょう(くずはら りょう)

皆さんこんにちは。私は今年初めて朗読会を、皆で声を出そうということで行動を起こしたのですけれども、広島市の平和記念公園で朗読会をしました。まだ私は宣伝とかいろいろ皆さんに呼び掛けることができなかったのですが、それでも二十～三十人の方が応えてくれて、この原爆詩集を持って峠三吉や原民喜を朗読したのです。広島市のあの平和記念公園というのは許可を得なくてはいけなかったのですけれど、それがギリギリ許可が下りまして、行きました。そうしたらいろんな人が参加してく

れて、長津さんも来てくれて、すごく嬉しかったです。こういうことをこれから始めていきたいと思っております。来年はもっとしっかりと呼び掛けて若い人にももちろん、……というか若い人もいないと私も寂しいので……。 (笑)一人ということはないんですけどね。ただ、今回も港敦子さんというやはり若い詩人が一緒に頑張ろうと言ってきて、それで二人で呼び掛けたような形になりました。そういう紹介はインターネットの港敦子さんのブログで随時流しておりますけれど、それもまだ不備でして、私自身もちゃんとホームページを立ち上げて宣伝を、ちゃんと声を出してやっていきたいと思っております。

それで、今年は長崎まで行きまして、永井隆博士の如己堂とかいろんな所を見て回りました。長崎でも若い子がいると思いますし、学生さん達とこれからやはり痛みとか経験、負の経験ですけれども、それがこの島国に突然降り注がれたわけですがけれども、それでもやはり痛みがあると思います。詩はそういう痛みを痛切に伝えることができる一つの有効な手段だと思っていますし、朗読をこれからも続けていきたいと思っています。というふうに自分がなぜ思ったかという、私は祖母のお兄さん二人とも皆戦死しまして、一人はパールハーバー(真珠湾)で参加して珊瑚海でレキシントンに体当たりして死んで、もう一人は芸術家として、ピアニストでもあったのですけれど作曲をやっています、同期に中田喜直さんがいましたけれど、そういう大伯父が死んでしまっていますね。下の方はもう嫌々ながら戦争に引っ張って行かれてそれで病死したという。もしその大伯父が生きていたとするならば、私という人間がポコッと後に生まれて音楽の話もできたと思うし、そこで自分もやはり身近に文学者というか芸術家がいたならばどれだけ今の自分の詩作に対して励ましになったのだろうかと思うと、やり切れない思いになりました。

それで、祖母は半世紀黙っていました。お兄さんの話はできなかったのも、もうほんとうに泣いていましたし、ピアノも聴くことができなかったそうです。でも数年前にやっと話を聞きまして、大伯父の作曲された曲も流しました第一回目の音楽会をやったのですが、そういうこともなかなか資料が無いものですから、作曲家の方はやはり作品があまり残されていない。でも、そういう活動もしているということも関わっていますが、私自身がとにかく詩を書く立場としてやはりホームページという有効な手段を使って声を出していきたいと思っています。

「出口はどこだ」という詩を朗読します。

出口はどこだ

沈黙させるな

言葉を

沈黙させるな

人間を

地球を

お菓子箱のように

ひゆるん と

それは降って来た

(何人かが見下ろして、何人かが見上げて)

エノラ・ゲイという名の

パンドラの

世にも奇妙なサンタクロース

真夏の歴史外れのサンタクロース

閃光の

そして

火球の

青空を煮立てさせた

あらゆる皮膚を音もなく

剥いでしまったあと  
ブラック・レインという名の  
ニガヨモギの夜は  
夜というにはあまりにも  
それは永遠の時間だったのだろうか  
歴史外れの時間……

沈黙させるなぼくの口  
沈黙させるな地球の緑、あのアオギリよ  
あなたの口よ きみの……

おおうい出口はどこだあ  
(おおうい……おおういいい……いい……)

こだまがこだまを呼んで  
あわててマッチをするように  
シュツと火球をするのですか

だれも泣けなかった  
永遠の時間が  
底のないトンネルを  
地球に  
ばかりと  
掘ってしまったという理由で  
(『一八一人集』185頁)

ホームページでも流しますので、またその時にお声掛けください。これからも毎年毎年行って、広島でやったらば長崎で。でも金が無いので。有馬先生のおっしゃったことすごく嬉しかったですよ。外国でもやろうということも今はまだできませんけれども、それは何とか皆で力を合わせて海外に発信していきたいと本当に思っています。痛みを、日本の痛みをというか原爆の、地球の痛みを伝えていかなければいけないと思っております。ありがとうございました。(一同拍手)

大掛史子 ありがとうございました。皆さま、どうぞこの青年を支援してあげてください。

次は下村和子さん、お願いいたします

下村さんは兵庫県にお生まれになりまして、現在大阪市在住でいらっしゃいます。詩集に『縄文の森へ』『風の声』。詩誌「叢生」、文芸誌「原石」の編集発行人をしていらっしゃいます。「日本現代詩人会」「日本詩人クラブ」の会員でいらっしゃいます。

下村和子(しもむら かずこ)

皆さんこんにちは。今日は朝出まして、大阪からやってきました。

わたくしは広島の被爆者でもありませんし、長崎の被爆者でもありません。けれどもわたくしが思っていますのに、あの時あの時点で日本の国に住んでいた人、住んでいたものは、広い意味で全員被爆者ではないかと思っていますのです。そういう意味でわたくしも「被爆者」と言って良いと思うんですね。むしろ私も被爆者であるという、そういう認識が大事なのではないかと思っています。そういう考えのもとでわたくしはずっと広島・長崎のことを考えてきました。そして峠三吉とか栗原さんなどの詩を朗読したりしてまいりました。今回そういう峠三吉などの詩と現代の詩人全部を包括した原爆詩集ができましたことを、とても良いことだと喜んでいきます。

今回読みます詩は、わたくしが長崎の祈念館にまいりましてそこで体験した気持ちをもとにして書

いたものです。長崎には資料館という大きなのがあるのですけれども、そこには割合たくさんの方がいらっしやるんですね。でも、そこから出ましてお向かいのところにもう一つの祈念館があるのですが、そちらの方にはほとんど誰もいないのです。実はわたしがまいりました時も、もう広い館の中に私ひとりでした。逆にほんとうに何かその時に死者と一緒に語り合うというふうな体験をしました。

「こわれもの 注意」

水の胎内へ 水の奥へ  
地下への階段を下りていく  
誰も居ない海の底の路を歩いていく

青く光る深海の廻廊を ゆっくり歩いていく  
苦しみの極を経て やっと流れついた水の館  
ほてる皮膚を今も冷やしつづけて横たわる寢室  
肉体を魔神に献上して 過酷な儀式を通過して  
辿りついた人、人、人、人、人

名前という姿になって 刻みこまれた寂の館  
長崎に作られた原爆死没者追悼祈念館  
身の文を忘れて 強い人類を目指した  
爆風を受ければ 焼けただれてしまう  
弱い身体を持った生きものであることを忘れてしまった罪を  
連帯責任という下品な言葉で 受けてしまった犠牲者たち

「こわれもの 注意」

小包にぺたんと押された印のように  
町中にポスターを貼っておかねばならない  
「フラジャイル」「フラジャイル」  
(『一八一人集』124頁)

大掛史子 ありがとうございます。「私も被爆者」という認識、重く心に届きました。

次は酒井力さん、お願いいたします。

酒井さんは長野県にお生まれになりまして、現在佐久市に在住していらっしやいます。詩集に『水の天体』『白い記憶』がございます。「日本詩人クラブ」の会員でいらっしやいます。

酒井力(さかい つとむ)

皆さんこんにちは。寒い所から出てまいりました。

私の父は台湾で十年、衛生兵から医師、警察とかいろいろなことをやっていたのですが、小学校の高等科を出てそれから軍人になったわけでありまして。八十歳の時に若い医師達に向けて「医師会報」に自分の生き方を示したということでありまして。それをこのたび原爆詩ということで鈴木さんの方からは是非書いてみないかということで勧められて、一つの作品にさせていただきました。

白い記憶

八十歳を迎えようとするとき  
父は地元の「医師会報」にと  
自分の歩んだ道を  
体験談を交え

口伝で私に書き記させた  
戦時中に父が書いた  
ガリ板刷りの戦時記録を  
初めて目にしたのも  
その時だった

父はどこに記憶を仕舞っていたのだろう  
淀みなく正確に  
日時まで入れて淡々と語り  
私はそれを書き取っていく  
母が時には顔をのぞかせ  
口を挟んだりもしたが

昭和九年  
父は予備役として台湾に渡る  
中国での激戦から救出され  
一度は帰国して後の応召だ  
衛生兵から医師になった父の元へ  
母は単身嫁いで行った  
それから十年  
広島と長崎への原爆投下  
そして惨めな敗戦を迎える

しばらくは中国人を相手に  
医療に携わっていた父だが  
いよいよ帰国というとき  
財産は没収され  
米一升とわずかな所持金に  
まだ幼い兄姉四人を連れ  
引き揚げ者満載の貨物船に  
父母はようやく乗船した

海は荒れ  
苦しむ船酔いも  
昭和二十一年四月二十八日  
広島湾沖に一晩停泊しておさまる  
DDT散布後  
大竹港から上陸する

原爆投下から八ヶ月後の広島  
広大な焼跡の一隅で  
母は米を炊いた

「白いご飯の味は忘れない」  
と語る老いた父の顔  
国のために  
一命を捧げんとした  
一人の医師は

戦争の悲惨さと  
生命への畏敬とが  
気持ちの中で交錯し  
思わず複雑な笑顔を浮かべる

敗戦の味を・みしめた家族  
その時私は  
母の胎内に宿され  
臍の緒を通し  
広島を感じていた  
見えない目  
聞こえない耳  
動かない体のまま  
わずかに心音だけを響かせ

生前父が低い口調で  
(戦争だけは……………)  
と呟いた言葉は  
かつて若いころに訪れた  
原爆ドームの記憶と重なって  
六十歳を過ぎた私に  
いま 鮮明に蘇るのだ

大掛史子 ありがとうございます。最新詩集の『白い記憶』がいま出来立てのほやほやで会場にありますので、後ほどお手にとってご覧くださいませ。

次は伊藤真理子さん、お願いいたします。

伊藤さんは福岡県生まれで現在は東京都墨田区にご在住ですが、広島にずっと長くお住まいでいらっしやいまして、最近東京の方に移っていらっしやいました。『伊藤真理子詩集』、詩画集『あしたきらきらⅠ・Ⅱ』がございます。長年「火皿」の編集発行人をされていらっしやいました。

伊藤真理子(いとう まりこ)

わたくしは敗戦の時にはまだ小倉に住んでおりました。出生地が福岡県小倉市(現・北九州市)で国民学校一年生で敗戦だったのですけれど、いろいろ戦後食糧事情や何かが悪く、母の郷里の鹿児島県大口市という所に引き取られ、ずっと学校生活はお世話になって卒業いたしました。ですから今日、喜界島の話が出た時に、「あ、同級生がいたな！」と思ったりしました。

それで結局小倉で一年生ですから、長崎に落ちた爆弾が、雲が小倉の上にかかっていなかったら、わたくしは死んでいたんですね。小倉の中心地ですから。兵器廠のすぐ近くでしたから。だけど、実は小倉が第一目標だったけど第二目標の長崎に雲のせいで落とされたのだということを知ったのは、成人してからでした。やはりそのこと、その後一九六二年から広島市に住みましたが、それはわたくしの母の妹の叔母が、夫が原爆に遭って原爆症で亡くなって一人息子がいましたので、それを育てるのを手伝うといひましようか、そんなことで他の妹の叔母達、結局三人叔母が広島におりまして、そういう引っ掛かりでわたくしもとうとう広島に引っ掛かってしまったのですけれど。

それで、三人の叔母達の連れ合いは皆被爆者です。そういうこともあってか何かわたくしはそのことにはあまり拘らなかったのですけれど、「広島に住んでいる」ということはどうしても避けて通れないことなのですね。原爆とかその他もろもろ、もちろん水爆も福丸もありましたし。そのことを詩に書きますと「伊藤さんは原爆にも遭(お)うとらんくせに、広島を書けえのお。あれを書かにやええんじやが」と、(笑)こう言われながら広島に約四十年暮らしました。家庭の事情で東京の下町墨田区に住んで今度の十二月のクリスマスが来ますとちょうど約三年になります。大きな「現代詩人会」にも「詩人クラブ」にもどこにも属さないで(笑)ぼかんとしておりまして、「火皿」という詩の雑誌に四十三年くらい関わったのではないのでしょうか。そんなこんなで二十年くらい編集をしておりました。ただ事務能力がちよっとあつたらしくいろんなことを押しつけられて、それもボランティアと思って、今頃「ボランティア」という言葉がありますがその頃は何か縁の下の力持ちでちよっとお手伝いをしてきました。

今日は皆さんのお手許にある『一八一人集』ではない詩を読みたいと思います。というのは、この五月に創刊されました「タルタ」という雑誌、千木さんという発行者に(今日は)来ていただいていますけれど、柳生じゅん子さんに誘われまして、その「タルタ」という六人での詩の雑誌が創刊されました、その創刊号に載せた詩です。この『一八一人集』の時に鈴木さんにこれを出したいと言いましたら、「丸山眞男なんて、翻訳するのだから外国の人によく分らないからこれはやめた方がいい」とか言われまして(笑)、結局『一八一人集』にはボツになっているのですが。一番新しい詩で、またやはりわたくしにしてはこのことは言うておきたかったという作品ですので、聴いてください。タイトルは「長い

黙禱」。副題に「丸山眞男について」 | | 政治学者の丸山眞男先生です。

長い黙禱

| | 丸山眞男について

あの一九四五年八月六日

あなたは

軍都 広島宇品の暁部隊情報班にいた

営庭での朝礼中 ウラニウム爆弾炸裂

鉄塔の陰で 直接熱線を浴びなかったという

八月十五日 全員でポツダム宣言受諾を聴く

それまでの九日間

ボロ布の塊になったニンゲンを

炭化した死体を

叫ぶ人を 呻く人を

どれだけ見たか 運んだか 介助したか

九月十二日召集解除

あなたは

自分の被爆を語らなかった

若き学徒の日

思想犯として検挙された栄光は

学士ながら二度目の応召

二等兵という戦闘員であった

南方の島々で 海で

大陸で ジャングルで

骨を拾われることもなく戦死した兵士

非戦闘員 無事の民

戦争が終わったとしても

辛くも生き残った義務としての赤子が

どうして 国家に償いを求められよう

殺すか 殺されるか

敵の原子爆弾にも生かされたいのち

祖国の無責任を言説するとき

戦闘員だったあなたは

その責任を甘受するほかなかったのだ

長い沈黙は

戦争による死者たちへの

長い黙禱ではなかったか

敗戦の日から五十一年目の八月十五日

兵舎の息子を案じながら旅立った母と同じ日

あなたは 旅立った

生涯 原爆被爆者健康手帳を

申請しなかった

大掛史子 素晴らしい詩を、ほんとうにありがとうございました。

次は鈴木文子さん、お願いいたします。

鈴木さんは千葉県生まれで、現在我孫子市に在住していらっしゃいます。『鈴木文子詩集』『夢』ほか多数ございます。「炎樹」の編集長をしていらっしゃいまして、「詩人会議」の会員、「日本現代詩人会」会員でもいらっしゃいます。

鈴木文子(すずき ふみこ)

「お前らよそもんに、何がわかる！」 | | この言葉は、今から三十七年前になりますけれども私が一人の被爆者から投げつけられた言葉です。

一九七〇年、当時わたくしは労働組合の役員をしておりました。それで地区労の代表として広島の新原水爆禁止世界大会に参加したのです。その頃は広島といえば平和公園の近くがまだすぐ乱れておりまして、トタン屋根に石が載っていてバラックの家が大変目立っておりました。そういう時期に参加したのです。それで、地区労の代表で参加しましたから帰ったらレポートを出さないといけないので、一緒に行きました仲間と「じゃあ、被爆者にインタビューに行こう」ということになりまして、夜、平和公園にテープレコーダーを下げてインタビューに出て行きました。もう元安川の夕凧がひどくて、とっても暑い夜でした。一人の被爆者の方が石の所にお座りになっていましたのでマイクを向けたその途端に、先ほどの言葉が返ってきたのです。

私は帰って来るバスの車中で、私の中に被爆者に対する驕りとか高ぶりとか野次馬根性がなかったのか……ずっと考えながら帰って来ました。帰ってきて私は、すぐに何篇かの詩を書きました。その時の一篇を今日は読ませていただきます。

風化

まっ黒なみかげ石に  
圧縮された白骨の文字が  
原爆で芽ぶいた  
無残な美を語っている  
補強され  
叫びの口をふさがれてしまったドーム  
二十数万の呻きを  
ぬりつぶしたような大通り  
私は多くの仲間達と  
広島の平和公園を歩いていた

肉体の一部が  
ケロイドの細胞が  
アルコールびんにつかっていた  
魂をはぎとられた根毛は  
ふたを押し上げることもできず  
こそこそと  
犯罪者のような触角を  
二十五年間さらけだしてきた  
夕日が錆びた鉄のように  
ポロポロと沈む公園に私はいた

新しい時間に

踏みつぶされている広島

生き残った者は  
貝のように口をふさぎ  
着飾った人々が  
言葉に化粧して  
ぞろぞろ歩いていた広島  
私も  
確かにその中の一人にちがいないが  
身をそぎとられるような痛さが  
とがった神経に  
腰を下していたのだ

今日も原爆の影をひきつれ  
一画に区切られた  
あの日の広島の一日が  
ふらふらと起ち上がるのを  
私は 息苦しく見ている

という詩を書きました。私の広島は、原爆に関わることといえば三十七年前の先ほど申し上げた被爆者の、今はもうお亡くなりになっているのではないのでしょうか、その方の一言から出発して私の中で今も息づいております。ありがとうございました。

大掛史子 鈴木さん、ありがとうございました。貴重なお話と詩の朗読でございました。

先ほどの伊藤さんの詩といい、今の鈴木さんの詩といい、『一八一人集』以外にもまだまだ素晴らしい原爆詩がたくさんあるということを実感いたしました。

次は秋山泰則さん、お願いいたします。

秋山さんは東京のお生まれだったのですが松本市に長くお住まいで、現在松本市在住でいらっしゃいます。『民衆の記憶』『流砂』という詩集がおありで、「松本詩集」の編集発行人をしていらっしゃいます。

秋山泰則(あきやま やすのり)

長野県の松本市からまいりました。ただ今ご紹介いただきましたように、昭和二十年に東京からただ今住んでおります松本市に疎開をいたしました。わたくしの家の真ん前に聳えております北アルプスの魅力に取りつかれそのままずっと今まで暮らしておりますので、たぶんここで生涯を閉じるのではないかと考えております。住んでみれば松本市という所は非常に良い所です、わたくしはこの街が大好きです。それでこの街で何かご恩返しをしたいと思ひまして、政治に参画をいたしました。

松本市という所は、この間の戦争では爆弾が一つも落ちなかったという珍しい都市です。B二九らしい物が二度ほど通過したということを知りましたが、わたくしが疎開してからは飛行機というものは敗戦の日のだいぶ後までずっと飛んだことがございません。そのような所でしたけれども、やはり軍事産業に関係する工場がありまして、朝鮮半島から連行されて来て強制労働をさせられたという施設がございます。

十数年前にやはりこの戦争をどこかで伝えなければならないということを考えて、この強制労働に従事させられた軍需産業の地下工場の跡を保存するということを松本市として決定していただくか、あるいは、小学生・中学生の子供達を広島の原爆忌というものに参加をさせるというようなことも市の政策方針として決定をさせました。そんなことがわたくしにできる戦争というものに対しての何かであるのかなと思ひました。

原爆につきましてもいろいろの考えがありまして、若い頃に比治山という所に半年ばかり住みましてあちこちを歩いたりお話を聞いたりいたしましたけれど、わたくしにとって戦争というものもそうです

が原爆というものはやはり重い課題でございまして、これを詩にするということはとても難しくできませんでした。言葉にすると「叫び」とか「呻き」とかそのようなものになってしまうことがほとんどで、未だに原爆というものを詩にするということは非常に難しい作業であるとわたくし自身は思っております。

ここで「原爆の痕」という詩を書きましたけれども、これもほんとうに原爆というものに即しているものかどうかということは、書きながらもわたくし自身疑問に思っておりました。先ほど下村さんのお話の中に「私達は全部が被爆者だ」というお言葉がございましたが、わたくし自身もこの戦争では日本人である限りずっと皆が遺族なのではないかと思っております。

そのくらいにいたしまして、「遺族」ということと、それからもう一つはここに「戦死」という原爆とは関係のない詩を載せていただきましたけれども、例えば原爆による放射能の後遺症という形でいろいろな苦しみを経験なさりながら亡くなっていく方、そういうことを考えますと、例えば戦争という中で軍隊に駆り出されその重労働のために肺病になって帰って来て復員後に亡くなったということは何人もわたくしも見聞きしておりますが、そういうものもやはり「後遺症」という名前で呼ぶのなら、放射能で苦しんで亡くなった方とも同じではないかと、そんなふうにしてこれを載せていただきました。それでは、朗読させていただきます。

#### 原爆の痕

人間を殺さなかった銃弾が壁を大きく抉っている  
人間を殺した原爆が石段に人間を焼き付けた  
影になった人間は焼き付けられて石段に座っている  
人間を殺さなかった銃弾と人間を殺さなかった銃弾の間は  
人間を殺した銃弾で埋まっている

人間を殺さなかった核実験は殺せる人間の数を増やし  
人間を殺した原爆は爆発で殺せなかった人間を  
六十余年かけて なお 殺し続けている  
人間を殺し続ける放射能は人間を恐怖で支配する兵器だ

#### 戦 死

従兄の肺病は 軍隊で無理をしたせいだといった  
街の医者へ行く日には  
私の家へ寄っていった  
家の中へは入らず、縁側に腰をかけて  
着物の中から 自分の茶碗をだした  
母がその茶碗に白湯を注ぐ  
従兄はそれをゆっくりと飲む  
私が近付くと 近付いた分だけ離れた  
母が近付いても やはり離れた

離れた分が従兄の愛で 離れた分の寂しさをこらえた事が  
私達の愛であった

ほどなくして従兄は死んだ  
少年兵の戦死であった  
屍は国旗に包まれることもなく  
敬礼して見送るものもなく 焼かれた

生きている限り私達は従兄を愛し  
愛し続けなければならない  
嗚咽の中から母の声が私の体に入ってきた  
(『一八一人集』147頁)

大掛史子 お心のこもったご朗読、大変ありがとうございました。秋山さんは幼い頃東京大空襲にも遭われて、そのことを書かれた素晴らしい詩が詩集の中にもございます。

滝和子(たき かずこ)

……今ちょっと胸がいっぱいになりまして。鈴木さんの詩を聴いた時に何かすごく涙が出てきまして、今また秋山さんの朗読を聴いて胸の中がいっぱいになってしましまして、何かこんな時に朗読ってできるのかなと思いつながら話しています。スピーチがあるということを知りませんで、詩を読むだけだったらと思って、私はこんなふうにかくさんの詩人がいる所で詩を読むことが初めてですから、ちょっと緊張しています。

私がふだんやっていることは、子供達に絵本を読むことをしてまして、いつも今のままで子供達はいいのかなあとか将来少し不安だなあと思いつながらいます。今回原爆詩のことで鈴木さんからお話を頂いた時に、「あっ、じゃあ書いてみよう」などと本当に簡単に受けたのに結局書けなくて「できません」と言ったら、たまたまこういう詩集(『きこえてくるよ』)を出したばかりのもので、その中にある「誕生日は」という詩が良いのではないかと鈴木さんに選んでいただき、今回の参加になりました。自分自身は戦後生まれで「学校は嫌いでも新聞と本だけ読むといいよ」と父に言われて育ったので本だけは、すごく戦争の本を読んでいたのですが、ある時期になった時にいつも疑問があって、周りの大人に言うのと応えてもらえないというかうるさいというか、それで一人で勝手に本を読むようになってきたのですけれども、今回のこの『一八一人集』を読んでいた時に、ちゃんと向き合っている大人というか、自分もいい歳なのですけれども、そういう人達がいるということがすごく私は嬉しいと思いました。

それで、鈴木さんが話してくれた時に、ああ、私も原爆に遭った人に一度会ったなというのを思い出しました。小学生くらいの時に「被爆者手帳」って初めて見ました。手帳を持った人が何か小間物を持って売りに見えていて、その時我が家もとても貧乏で借家暮らしで、入口の上がり端で母が対応して泣いていたのを私は鈴木さんの詩とお話で思い出しました。

では、すごく緊張しているし胸がいっぱいなので読むのにちょっとあれですが、「誕生日は」を読みます。これはずっと前に子供が言ったことをそのままメモをしたというか書いただけの詩なのですが。

誕生日は

八月が近づくと

広島・長崎を思う

小学生だった二男が

ある日突然

「ボクの誕生日に

原爆が落ちたんだって」

家に着くより早く

カバンを背負ったまま

言葉を投げるように

私に向かって来た

「赤飯なんて

ケーキもいや…」

その年から

八月六日の祝いは  
二週間おくれ・・  
長男の生まれた  
八月二十日にふたりぶん  
ひとつのケーキを分け合いながら  
この国にも 戦争があった と  
振り返る日になった

リトルボーイ リトルボーイ  
広島空・・  
(『一八一人集』216頁)

大掛史子 ありがとうございます。初めてのスピーチ・朗読、大変心に響きました。

次は安永圭子さん、お願いいたします。

安永さんは山梨県生まれ、東京の府中市にお住まいでいらっしゃいます。詩集に『いのちいっぱい 咲くからに』『七月六日の赤い空』がございます。「飛天」「櫟」の同人、「日本現代詩人会」会員でいらっしゃいます。

安永圭子(やすなが けいこ)

戦争が終わってずいぶん経ち世の中が平和になりましてから、長崎とか広島原爆記念館を何度か訪れました。その時いつも私は体の外側から手を内臓にねじ込まれたような痛みを感じまして、それで苦しくて蹲ってしまうのです。それは、私が小学生の時に甲府で空襲に遭いました。ちょうど七月六日ですから、広島に原爆が落とされる一か月前なのですね。その時にとても怖い思いをしまして、その記憶が重なってしまいまして、それで苦しい思いをするのです。

ちょうど十歳でした。父が仕事で遅く帰って来ましたので逃げ遅れまして。熟睡しており気が付きました時は隣の軍需工場にものすごい音で爆弾が落ちて燃え上っておりました。びっくりしてその時にやっと家中が起きたわけです。もう表通りは火の海でして、音をたてて商店街が燃えておりました。もちろん防空壕には誰一人おりません。もぬけの殻でした。それでも「この火を突っ切らなければ生き延びられない」という父の声で、防空壕の中の筵を剥いで防火用水に浸しまして頭から被り、その火の中をくぐりながらあちらこちらと逃げ回り、やつの思いで土手の方まで逃げて行くことができました。

その夜の怖さとかそれから翌日の悲惨な光景は記憶の中にいつまでも消えないで残っておりまして、夢にも見ますし夏になれば思い出します。もう弟も亡くしておりますので、ああこの思いはいつになったら消えるのだろう、忘れてしまいたいと時々思っておりました。でも、どんなに長い年月が過ぎましても忘れるものではないんですね。

それで息子が同じくらいの歳になりました時に、ああこんな思いをもう息子にはさせたくない、戦争の犠牲者にはしたくない、息子に銃なんか持たせたくないと思うようになりました。それにはどうしたらいいかと真剣に考えまして、微力で少し弱い人間ですしできることはあまり無いけれども、でも、常に世の中の風に敏感に、国の方向がどのように動いているかということに敏感であるように心掛けてきました。デモにも参加しましたり、チラシを配ったり、いろいろ私なりにできることをしてまいりましたが、だいたい歳をとりましてからふっと「あつ、もう一つできることがある」と思いました。それは私の空襲体験を詩集として出して、それで未来を生きていきます若い人や子供達に語り部のように伝えたいと思うようになったのです。それが私には今できることではないかと思い付きまして、最近詩集を出しました。それは『七月六日の赤い空』です。その中に原爆記念館に行きました時に空襲の体験と重なった思いを詩に書きましたのが載っておりますので、それを今日は読ませていただきます。忘れたい、忘れたい、と思っておりましたけれど、このことは絶対に忘れてはいけないということなのですね、もう原爆のことであろうと。

それから、日本全国空襲を受けた所を私は調べまして、地図に赤丸を付けていったんですね。そうしましたら、もう真っ赤に埋まってしまうくらい日本全国空襲を受けているのです。ですからそういうことを、まるで日本列島が爆撃の炎で燃えているような感じに印をつけてあとを見ました時に、絶対に忘れてはいけないのだ、皆絶対に風化させてはいけない、四分の三くらいの人は戦争を知らないそうですから、あとの今生き残っている四分の一の方々が一生涯語り伝えていかなければいけないのではないかなどと思っております。

それでは、その「忘れてはいけない」という詩を読ませていただきます。

忘れてはいけない

滅茶苦茶ノ爛レタ顔ノ  
ムクンダ唇カラ洩レテ来タ声ハ  
「助ケテ下サイ」  
静カナ言葉 コレガ人間ナノデス  
人間ノ顔ナノデス

(広島原爆記念館掲示パネル・原民喜『夏の花』より)

あの日から五十年以上の歳月が過ぎた  
広島原爆記念館でその詩を  
思わず声を出して読みあげた瞬間  
小さなパネルの中から  
血濡れた手がぬっと突き出て来た

うめき声も聞こえて来る

忘れたい  
思い出したくない  
日常は時の地底に鎮まっていて  
起きあがってくることはないのに  
悪夢のような光景がまざまざと呼び醒めされた  
鉄の雨で破壊され火にあぶられた  
恐ろしい顔 火中からの断末魔の悲鳴

郷里甲府での記憶がかさなる  
十歳だった  
空襲の真っ只中を線路づたいに逃げた  
棒切れのような黒いかたまりに躓く  
老婆が焼け爛れた顔をあげ  
どろどろの手をのばして  
モンベの足首をつかんだ  
「助けて！ 水を 水を！」  
その手を声を  
払い捨て父の後を追って走った

昭和二十年七月六日

B 爆撃機一三九機甲府盆地空襲  
投下焼夷弾約九七〇トン 全市の七四%焦土と化す  
焼き殺された非戦闘市民一、一二七人

大掛史子 ありがとうございます。安永さんは、ご本名の渡辺圭子さんというお名前でご画家としても活躍されていらっしゃる方です。幻想的な美しい絵もお書きになられて、多彩な才能をお持ちの方でいらっしゃいます。

次はうおずみ千尋さん、お願いいたします。うおずみさんは視覚障害者でいらっしゃいますので介添えの方、お願いいたします。

福島県にお生まれになりまして、現在金沢市にご在住でいらっしゃいます。詩集に『凌霄花』『牡丹雪幻想』があります。「衣」の同人、そして「日本現代詩人会」の会員でいらっしゃいます。

うおずみ千尋(うおずみ ちひろ)

皆さまこんにちは。はじめまして。今日はこの素晴らしい出版記念会に参加できて、ほんとうに嬉しく思っております。金沢から東京に出るのはわたくしにとってはとても大変なことだったのですが、ほんとうに来て良かった。

わたくしは今年の四月にコールサック社から『牡丹雪幻想』という詩集を出版した者でございます。たぶんここにいらっしゃる皆さまのお手許には届いていると思うのですが、今日総合司会をなさっていらっしゃる山本十四尾様とそれからコールサックの鈴木比佐雄様、このお二人とのご縁によりましてとても素敵な装幀の本をつくっていただきました。その詩集づくりがきっかけになりまして、わたくしは今回この『原爆詩一八一人集』に参加することになったのです。

ですが、わたくしはここに載せていただくためにわざわざ原爆の詩を書いたわけではございません。今から十二年前、ちょうど被爆五十周年の年にわたくしは、ずっと気になっておりました詩を書いている者として一度も広島に行ったことがないことをとても気にしておりましたので、「五十周年」ということを意識して広島に出かけました。その時に書いた作品が今から朗読させていただきます「八月 蝉しぐれ」という詩でございます。わたくしは、個人的なことで恐縮ですが、長いこと患っておりました緑内障という眼の病気のためについその後視覚を失ってしまいました。完全に、見えないので、いまここにいらっしゃる皆さまのお姿、残念ながら全く拝見できておりません。そんなわけで朗読は無理ですので、覚えてまいりました。どうぞ聴いてください。

八月 蝉しぐれ

?被爆五〇周年に?

聴こえているでしょうか?

あなたの 耳にも

八月の目眩めく陽射しのなかで

樹々を揺さぶって降りしきる

蝉の声

五〇年

この地を覆い続けて来た

重い重い祈りを押し上げ

蝉は

今年も また

人類の罪と哀しみの震えのように

地中深く闇の裂け目から夥しく這い出して

あの

一瞬の閃光を見極めようと

天に向かって声を振り絞っているのでしょうか

被爆

敗戦五〇周年

広島

この夏

鳴き続けて止まない・しぐれの下で

わたしは今

魂の叫びを聴いているのです

熱射の中 この土に溶けて沁みて行った無数の命の

いま尚

曳いて呻き続けているその痛みの

永遠に塞がらない

焼け爛れた空洞を

烈しく凝視めているのです

(『一八一人集』114頁)

大掛史子 ありがとうございます。心の眼で読まれた素晴らしいご朗読、感動いたしました。

次は千葉龍さん、お願いいたします。

千葉さんは石川県生まれで、金沢市にご在住でいらっしゃいます。『炎群はわが魂を包み』『死を創るまで』という詩集がございます。「金澤文學」の主宰をいらっしゃいます。「新・現代詩」のご同人でいらっしゃいます。「日本現代詩人会」「日本詩人クラブ」の会員でもいらっしゃいます。

千葉龍(ちば りょう)

金沢からまいりました。今日は詩を朗読いたしません。たまたま今日頂いた資料(冊子「『原爆詩一八一人集』メディア紹介記事一覧」)を見て、この中にわたくしの毎日新聞に書いたコラムがあります。これを朗読させていただきます。一二頁です。ここに、わたくしが毎日新聞に月二回書いているコラムがございます。

《思い込みもあるだろうが、ぼくの十二歳のときから六十二年間の盛夏八月。いわゆる八・六／八・九／八・一五の表記で記憶される三日間で雨の日はなかった。広島のウラン、長崎のプルトニウム型原爆は共に空襲警報解除後に突然、ふらふらと現れた一機のB二九によって投下され、二つの都市が壊滅する。数えきれぬ市民を殺し、重症者と後遺症で苦しむこの世の地獄を今に続けさせている。

あの灼熱の夏、八月十五日。日本の全面降伏による終戦…。十二歳の少年はその月の竟りに三十四歳の母を孤り送った。長かった十五年戦争のトンネルをくぐりぬけた。

梅雨明けの一日から連続真夏日・猛暑のこの夏、八・六にアンソロジー『原爆詩一八一人集』(長津功三良ら編・コールサック社刊)が世に出た。わが親友の詩人で原爆をテーマに精魂の詩を書きつづける長津(広島生まれで山口の住)を詩人の山本十四尾(茨城)、評論家の鈴木比佐雄(千葉)が扶(たすけ)ての所産だ。

八月四日付毎日新聞の「土曜解説」(全国版)に広岩近広専門編集委員は「原爆芸術文化／地味な継承に希望の灯」と全面スペースの規模で〈体験しないものが去っていくものたちからバトンを受け取ってその惨を、非人道性を詩というかたちで表し、さらに次の世代へ…〉と「被爆六〇年」を経ての収穫を、優れたジャーナリストの確かな目で称揚した。西日本、中国、下野、朝日…と全国の各紙にも報道・解説される。ジャーナリズム死なずがうれしかった。

ふだん詩に縁の薄い人でも、峠三吉、栗原貞子、原民喜ら世に膾炙された原爆詩人に加え、湯川秀樹博士や小野十三郎、石川県ゆかりの永瀬清子＝以上故人。現役詩界の山顛に立つ浜田知章(石川県出身)、新川和江、日高てる、西岡光秋ら数多い有名詩人に再めて瞠目するはずだ。手前味噌ながら小生も新作「ヒロシマ・ナガサキの落穂」で驥尾に。

いま、世界に向けて英訳出版も進んでいる。暑い熱い夏にこそせめて書店の広い読みから始めてほしい。(千葉龍)

(「文化サロン」＝毎日新聞北陸総局・二〇〇七年八月二十四日付)

大掛史子 力強い論文をお読みいただきまして、ありがとうございました。

次は日高のぼるさん、よろしくお願いいたします。

日高さんは、原水協の重い立場の方でいらっしゃいます。北海道にお生まれになり、現在埼玉県上尾市にご在住でいらっしゃいます。詩集に『緑色のマフラー』『どめひこ』があります。「梢」「いのちの籠」の同人でいらっしゃいます。よろしくお願いいたします。

日高のぼる(ひだか のぼる) こんにちは。二四四頁に掲載させていただいた「セミ」を朗読します。

### セミ??校歌断章

うす曇りの空の木の下を歩く  
むし暑い空気かきまわすように  
セミが鳴きしきっている  
広島平和公園

幹には抜け殻がいくつもぶらさがっている  
木の表面をなぞるように見上げていた  
ちょうど目の高さの〈抜け殻〉に  
足を止めた

近づいて目をこらしそっと触れてみる  
少し背が割れていたが  
そこまで昇り羽化をやめたのか  
サナギのまま息絶えていた

八月六日 元安川のそばで  
家の取り壊し作業を開始した少女たち  
ひとり残らず灼かれた

孵らなかったセミは  
およそ七年も土のなかで暮らし  
生をつなげるため羽をひろげ  
ひととき華やかに飛び回る  
その晴れやかな姿を  
なぜ見せなかったのか

大火傷をおった少女たちは満潮の川にのがれ  
先生を中心に輪をつくり

校歌を歌い励ましあいながらも  
力つきて流されていった

そのセミを見上げるところにある  
広島市立高等女学校の慰霊碑  
建物疎開に従事中の一、二年生と職員  
六七六人全員が死亡

文の林に分け入りし乙女われらは  
朝夕に教えの御言

河面を流れていったその歌声を残し  
鉢巻きにモンペ姿で灼かれ  
殺された少女たち

二葉の山の松の如く緑の色も常盤なる  
操守りて永久に

セミの鳴く声にのせ  
サナギの殻に閉じ込められたまま  
ふたたび眠りにつく  
うすい緑色の羽にくるまれた  
少女の  
透明なからだ

\* ……広島市立高等女学校(当時)校歌の一節  
(『一八一人集』244?頁245)

長津功三良 いま日高さんに読んでいただいた「広島市立高等女学校」ですが、後に新制高校になりまして、私の母校です。  
大掛史子 ありがとうございます。

順調に進んでまいりましていよいよ最後のお一人、遠山信男さんをお願いいたします。トリに相応しい大物詩人でいらっしゃいます。

遠山さんは一九二一年岩手県生まれ、八十六歳でいらっしゃいます。ほんとうにもう多彩な活躍をなさっていらっしゃる方です。佐倉市に在住していらっしゃいます。『釜石風景論』『詩の暗唱について』の著書がございます。「詩人会議」の同人、「日本現代詩人会」「日本詩人クラブ」の会員でいらっしゃいます。後ほど懇親会でたぶん、タップなどもご披露なさるのではないかと期待しております。よろしく願いいたします。

遠山信男(とおやま のぶお)

私は非常に暗唱に拘っているわけですが、九条の会」が出る二カ月前の二〇〇四年五月三日の憲法記念日に、私は単独で詩人会議の一会員パワーという形で津田沼駅前で「憲法九条は日本の宝。世界の、地球の宝」というスローガンを看板に書いてパフォーマンスをやったことがあります。

やはりいろいろ考えてみますと、例えばその街頭パフォーマンスをさらに定着した発展した形で、あるいは「吟遊詩人」という言葉は日本には無いようですが、吟詠詩人的なタイプの庶民運動をやるような、街頭でそういう詩の朗読でも暗唱でも良いわけですが、そういうのがパフォーマンスとして可能ではないだろうかと思えます。

例えば私の場合、津田沼駅前で二回ほどやった経験なのですが、京成線の臼井駅で定着的にやるといことが考えられる。その場合に私としては英文の対訳がある峠三吉の有名な『原爆詩集』をテキストにして、それから小・中学生の原爆時の詩集がありますね？これが素晴らしいですね。やはりこれは朗読でもいいし暗唱でもいいわけですが、そういう街頭パフォーマンス、詩の署名運動をやる人達もいるわけですけど、そういうふうな場で街頭パフォーマンスとしてそういう詩の行動の形式を創り出せないだろうかと思っております。私もこれから何とかしてそういうケースを作っていきたいと思っております。

急に朗読するように言われましたので、練習不足なのでちょっとテキストを見ながらということになりますが……。

詩もまた行動します

かがやく青い地球のために

私は私という核をもつ地球のそれなりの内部

地球は内部の私からみえる母体天体

かつて宇宙飛行士ガガーリンが「地球は青かった」といったその地球

私は地球のそれなりの内部のここのように地球を生きる

私のここのいのちのすがたでせつせと生きる

地球のいきおいの そのかけがえない一つのはず

と自分にいきかせながらの一心不乱

でもね

とんでもなくいやなことしんばいなこと

私のなかの核は

パスカルのあの「考える葦」にも似たそよぎのなかで

ひたすらに詩をもとめる核なんだけど

核は核でも“恐怖の均衡”の抑止力なる名のもとに

母胎天体の地球を死の淵にぶちこむほどの量の核 熱核

大量殺戮兵器の核が

アメリカ ユーラシア両大陸の大(小)国間にひしめいているんだとはねえ

けれどそういうなかで詩は無口であっていいはずないよねえ

地球よ

母なる地球よ

わたしたちぼくらおれたちわれらの地球よ！

とね

詩もまた行動します

地球の地平から核兵器の一切を廃絶せよ！

とね！

かがやく青い地球のために

かがやく人間いきものたちすべてのために

核兵器をなくせ！

(『一八一集』223頁)

暗唱より朗読の方が良いようですね！（笑・一同拍手）

大掛史子 遠山さん、ありがとうございました。これからもますますお元気で一層のご活躍をなさいますように。

滞りなくスピーチ・朗読が終わりました。大変拙い司会で失礼いたしました。ありがとうございました。(一同拍手)

### 第三部 翻訳者のスピーチ

山本十四尾 第三部は翻訳者の立場のスピーチですが、時間が食い込んでおりますのでご理解のうえご協力の程お願いいたします。それでは郡山さん、お願いいたします。

司会・郡山直(こおりやま なおし) この詩集を分担した最初のほうから順番でいきたいと思います。私の話は終わりましたから、私の次の部分を担当した人は水崎野里子さんです。

水崎さんは早稲田大学の英文科を出られて、もう詩の方面で非常に活躍しています。バイリンガルの詩集、ご自身の英語の短歌集があります。

水崎野里子(みずさき のりこ)

実は、三日前にアメリカから帰ってまいりました。アメリカでは短歌や詩などを英語と日本語で朗読してまいりまして、翻訳者会議でございました。

ひとことで申し上げますと、「感謝」のひとことでございます。翻訳者というのは影の力持ちということがございますが、皆さんの翻訳をさせていただいておまして一人ひとりの方の魂に触れられて、それを英語に直していく喜びということ。

それで、世界詩人会議(WCP)という世界的な詩人の集まりがありますが、早くも「早く出せ」というお達しが来ております。やはりこれからは日本語と同時に英語でもどんどん日本の詩を発信していくお手伝いをさせていただきたいと私は思っております。

それだけなのですが、それだけではちょっと舌足らずでございますので、一つわたくしの作品を読ませていただきます。「作品」と言うてはいけませんが、翻訳者会議に出ましたらやはり翻訳も詩と同じクリエイションでなければいけないと言われてまいりまして、「はい」ということで少し頑張っていきます。

ジャック・ゴーシュロン Jacques Gaucheron というフランスの詩人です。大島博光様という方がすでにフランス語から日本語に訳されております。長いので後半を読ませていただきます。

### UNDER THE STAR OF HIROSHIMA

"Armand, I have to write to you now  
That I will not be able to come back to you again.  
Because of cancer or something worse.  
My skin peels off and flies away  
Like a robe fluttering in the wind."

"Doctor, blow me your breaths, Doctor.  
Days pass away from a long expectation.  
I cannot understand at all this, my role.  
What is happening to me?  
This drama is written in the color of blood."

In the next scene what will happen?  
I don't know. Nobody knows.  
To read this tragedy  
To see through the mystery and the secret

I must use a microscope.

"Sitting before a mirror, I comb my hair.  
The color of my hair flies away from me,  
Like smoke blown away by the wind.  
My hair has turned white."

"Armand, about beauty, about youth,  
What should I think of them now?"

"This is a strange role, Doctor,  
I am acting slowly my venture  
To give you time.  
Inside me a graceful orchid will start growing."

Midori, Midori,  
It is always dark, and in the midst of the night  
In the drama of blood  
There is nothing but the endless dark night.

"In the night on a hill where cherry blossoms are in bloom  
I will dance under the moon in May.  
How pleasant it will be!"

The hands of my lover are as the caresses of a fan.  
His kiss is a gentle rain which falls on my flowers.

I will give birth to the child I have dreamed of.  
He will resemble me.

He will smile like a cherry blossom  
He will open his eyes like pearls  
Toward the moon on my breasts.

He will resemble me.

Doctor, please revive me.  
Inside me  
A terrible death has settled  
More terrible than the god of death.

Each of my bones is an anvil from hell.  
I am fearful to give birth to one who will be horrified.

Among dead birds, a burning stream floats  
Cradling nameless dead bodies.  
I am in moonlight.

Carrying flowers, drowned without resisting the current  
In my drama of blood

I will slowly bring forth  
Death for the end of the world.

"Even now, Armand,  
About my love, about my youth,  
What should I think?"

The Atomic death  
Under the irradiation of strontium  
Under the irradiation of beta rays and gamma rays.

Farewell, farewell, Midori Naka!  
For your bravery  
For your beautiful memory, please take a camellia.

A flake of snow!

To create a shout to protect you  
A whole life is left to you.

A white camellia!

Nothing more of Hiroshima.

Midori Naka!

You are a flake of snow.

VII

Children in Hiroshima will grow up.

Tomorrow, when I grow up  
Mother, when I grow up

But a god of death has settled at a doorway in the city.

A heavy mantle of a new city was thrown  
On my shoulders and on my boyhood.

But a god of death is still sitting on the edge of an empty space.

Tomorrow, Mother,  
when I grow up  
I will tame the sun  
Collecting all the mirrors to reflect life  
I will become a scientist.

Throwing light at physics  
I will study hard and make a lot of friends

In every laboratory on earth

When I grow up.

But terror has settled on the paved stones of the doorway.

I will find out the way to go.

I will find out a passage between pain and indifference.

On transparent tears

a good intelligence will shine bright

But a god of death still sits

At the crossroad for strategy.

I will grow up.

Translated by Hiromitsu Oshima from French into Japanese.

Translated from Japanese into English by Noriko Mizusaki.

郡山直 どうもありがとうございました。

次の部分を訳しました大山真善美さん、どうぞ。

大山真善美(おおやま ますみ)

こんにちは！ 私が訳した詩はあまり多くないんです。分担していて、ここまでが私でここからが郡山先生でとかいろいろあったのですが、間に大学の英語の教授の先生が入ったのでこれは皆その人がやっていると思ったんですよ。ところがその人は「いやいや、やらんやらん。大山さんやってくれ」と言われて。(笑)まあついでに訳した。それで、この人が踊りの詩で慰霊祭が終わった後に霊たちが集まって踊っているという面白い詩だったのですが、そこを訳したら郡山さんが「ああ、私は踊りが好きだから訳したわ」(笑)「大山さん、せんでいいから」と。「ええ | つ、訳したのに！」と言ったんだけど。そういうことで何か分担がちよっと曖昧だったのですが、頑張って訳しました。

私は昔、中学校の英語の教師をしていて、一応英検とか通訳案内業とか資格はあるのだけれど、いわゆる車の部品の名前を知っているぐらいで全然、実用はまあまあしかなかったんです。それで果たして翻訳はできるのだろうかと思っていたのだけれど、中学生相手に例えば(板書をしながら)ランチって皆lunchと書くでしょう？ ……何か違いますか？ lunchなんですよ。皆に「lunchはローマ字読みしたらどうかな？ そうだね、エルね。ここunchは何かな？」とか。(笑)……ちよっと下品になってしまうので読めませんが、エル・××チ(unch)という……ね。そういうのを長いこと教えていたのです。二十年くらい。(笑)ですから、何かだんだん英語が錆びたような感じがして、できるんだろうかなと思ったのですが、その時に偶然典子さんというすごく優秀な人が現れて、日米学生会議に選ばれたという、日本二十人・アメリカで二十人優秀な人が集まって今後の日米の関係を語ってこういう政府に選ばれた人がいて、この人と、この人の親戚のリッチ君と、私が教えに行っている小学校にいるジェイソン君がいきなり現われてきて。私の教え子の友達だったんですけど。その教え子というのがまたやんちゃな坊主で、「もう大山だけは嫌いだ。大山だけは嫌いだ」と言ってから作文に書いて、私がおの作文を皆に配ったんですけど、隣のクラスの先生が「これは配らん方がええで。これは大山さんが変な先生だと思われるので配らんほうがええで」と言われたのだけど、「いやいや、この子の真実じゃけ、配らにやいけんのじゃ」と言って配ったんですよ。その子は最後まで反抗し続けて、そのクンちゃんという子が何と紹介してくれたという。それで、クンちゃんは沖縄へ行く時に「大山さん、お別れパーティーに来てくれ」と言うので行ったらこの人がいて、この人は、家が会社だったんですけど、その社長さんがいた。この人が私が結婚した人の親、舅だったんですよ。そういう縁があって、典子さんは小さい時から「おじいちゃん、行ってきます」「ただいま」と十六年間言っていた。

私も同じ人に同じことを十六年間言っていた。(笑)それでまあ、それからあと別れたんですけど。でも、何かすごく縁があるなということで親しくなった時に、その翻訳のお話をいただいて「大山さん、翻訳してください」と。「ああOK、OK！ 典子さんもリッチ君もいるからできるわ」と思ってやったのです。

その時のネックになったのが、先ず名前ですね。人の名前が分らないんですよ。物の名前とか青桐とか何とか。あと、高さんとか。これはKouで良いのかとか。中国人の友達に聞いたらガオと言って。そういうことが一番ネックでした。

次が教養の欠如です。自分にいかに教養が無いかというのを思い知らされたんです。鈴木さんの詩に「カンパネルラ」という人が出てきて、「これ何ですか、鈴木さん？」と言ったの。「いやいや、宮沢賢治」。それを知らずに人の名前も分らないと言って。鈴木さんが「宮沢賢治を読んでください」ですよ。「日本のgreatest poetだと言ってください」と言われて「ああ、済みません！」。こういうのを思い知りますね。

あとは内容ですが、内容がよく分らなかったです。自分の読解力不足が主なのですけれど、要するに私は頭が悪いというのが主なだけ。でも内容で、例えば先ほど下村和子様を読まれた「身の丈を忘れて 強さを望みすぎた人類／爆風を受ければ 焼けただれてしまう」(「こわれもの 注意」)というので「連帯責任」というのがあって、これはやった方に責任があるのだけど、「では受けた方はなぜ連帯責任を負わなくてはいけけないのだ」というふうにリッチ君とかに突っ込まれて、いやいやこれはどうなんだろうと。それで下村さんに余程電話しようかと思ったのですがburdenにすればいいんです。The burden of joint responsibility「重荷を背負った人」というふうな表現にすれば良いと言われて、全部解決できたんですよ(笑)。非常に外人に説得するのは難しくて、「いやあ、これは重荷だよ」というふうなことを典子さんが言ってくれる。日米学生会館に行ってくれてありがとうございます、と言って。

だから、私だけだったらちょっとできなかったかも知れないけど、こういう偶然の一致が非常に起こっていて、自分はやはり訳すべきだったんだなと思いました。

あとは、思い込みですね。「核廃絶」といったらthe distinguishment of nuclear weaponsだと思いついて、自分は打ったんです。そうしたら典子さんは「いや、これはabolishmentだろう」と。自分は全く思い込んでいるから、チェックする人が無いとそのまま行っちゃうんですね。ですから、非常にこの三人のメンバーは強力だったんです。ところが、訳したあとにジェイソンは高熱が出てぶつぶつが出て倒れた。ジェイソンがやられて、私もやられて。私も何かいっぱいケロイドみたいなのが出て倒れて。それでリッチ君は、すぐにアメリカに帰っちゃって無事だったんですけど。典子さんもかなり熱を出して「もう私、耐えられない！」とか言い出して。

それでふと思ったのが、やはり何か縁があったなと思って。「私達は広島原爆で焼かれて死んだわ」と思って。ジェイソンもおかしいですよ。外国人だったら原爆を正当化するのに、自分のパソコンの待ち受け画面を広島平和公園にしているんですよ。「絶対原爆許せない！」と言っているし、リッチ君も「全ての核兵器を廃絶すべきだ。僕はそのために闘う！」とか言っているんですよ。だからたちまちそういうのが集まってこういう翻訳ができたなあと。私一人だったら、もしかしたらこれからできるかどうかは自信がありません。(笑)いや、何か仕事があったらください。頑張ります。

(一同笑い・拍手)

郡山直 大山さんは、コールサック社から学校のいじめの問題を取り扱っている『学校の裏側』という立派な本を出しています。

それでは、最後の所を訳した結城文さん。

結城文さんはお茶の水の大学にいます。英語短歌集で『DROPS OF DEW』があります。

結城 文(ゆうき あや)

皆さまこんにちは。わたくしはこの一八一人の一人に加えていただきまして、とても嬉しく思っております。わたくしの詩は二七七頁にあります。また、このほかの三名の方と一緒に英訳を担当させて

いただきまして、とても光栄に思っております。

わたくしが英訳に関わり出しましたのは、初め短歌の英訳から入りました。短歌はもう三十年くらい書きつけていて、ちょうど一九九二年に、それまで短歌というのは学者が万葉集とか百人一首を英訳しているけれども、歌人の感覚でひとつ英訳して、それはこれが日本古来の千三百年以上の歴史をもつ定型詩なのだということを世界に発信しようではないかという機運が生まれて、それからずっと短歌の英訳をしてそれを世界に向けて年に二回「歌人クラブ」の方から定期刊行物を出しつけております。お陰様で短歌人口はもう世界に千人くらい英語で短歌を書く人が生まれて、一番多いのはアメリカです。アメリカ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリアといった英語圏。それからUK(英国)ですね。その他にもやはり英語にしておくとして英語以外の方でもその英語を見ながら自分も英語で書いてくれる。例えばフランス人とかドイツ人でも若干加わってくださる。

それで、先ほどの話でこの『一八一人集』もフランス語とかロシア語とかに翻訳されたいというお話がありましてほんとうにそうだと思いましたが、英語版が出て、フランス語版が出て、ロシア語版が出て、ということはなかなか難しいことです。ですけれども一度英語にしておきますと、それはそれを読んだ人が中国の人であれ、モンゴルの人であれ、マレーシアの人であれ、必ず心ある人がそれを読んで自分の言葉に、英語から自分の言葉にしてくれます。その意味で英訳というのは、一度英語にしておけばそれが次第に世界に浸透していくのではないかと考えております。

長崎には長津さんとか御庄さんみたいな強力な詩人があまりいらっしゃらないので少し寂しいのですけれども、長崎に住んでないからあまり力強い動きはしていませんがさいたま市に住んでいる本村俊弘さんという方が毎年八月の九日前後に「長崎原爆平和祈念 詩の夕べ」というのを長崎に帰ってやっておられます。それが短歌でもあるし、詩でも、俳句でも、それから音楽の演奏でも、原爆資料館でパフォーマンスをやっていらっしゃいます。

もう一つ、長崎資料館の姉妹館というのが、これも皆さまはあまりご存じないと思うのですが、島根県の雲南市という所にございます。今から三年前に小さな五つの町と一つの村が合併してできた市です。その三刀屋町という所で永井隆博士が生まれて長崎大学に行くまで、そこが永井隆博士の故郷なのです。永井博士のお父様という方が三刀屋町でお医者様をしていらっしゃったのです。ですから雲南市には長崎の原爆祈念館の姉妹館として「永井隆博士記念館」というのがございます。それでわたくしも鈴木さんをお願いして、この『一八一人集』をそこへ送っていただきました。今それが雲南市の永井隆記念館にもあります。

今度は私事でちょっとわたくしの思いなのですが、歴史というのは常に勝者によって書かれていきますから、やはり世界の歴史の中でも日本で原爆についての記憶が風化している以上に、第二次世界大戦の終わり頃に日本という極東の国に原爆が落ちてそして大戦が終わったという記憶、世界の人びとの記憶も我々以上に風化しているのではないかと思います。そういう時に英訳版が出るということは、先ほど申しましたような理由で、小さな、最初は小さな種子かも知れないけれどもそれがだんだん育っていく、双葉になり、若木になり、育っていく種子を蒔くことではないかと考えております。

それで『一八一人集』に入れていただきましたわたくしの詩ですが、それが当時昭南島(現シンガポール)という島にちょうど終戦の少し前に私の父が現役の陸軍中佐で赴任していました。何をしていたかという、飛行機の燃料になるような石油を日本に送る仕事をしていました。ところが、いよいよ日本の戦況が悪くなって本土決戦というようなことが叫ばれ出して、十人ほど父あるいはもう少し若手の人が参謀として日本へ呼び寄せられました。その時は制空権がもう敵の手にありましたので、普通に飛んでいたのでは撃ち落とされてしまう。それで、中国大陸の方を何度も何度も転々としながら日本の信州の松本飛行場まで辿り着きました。それから立川飛行場に向かう途中、飛行機が二台出て最初の飛行機は無事に立川に着けたのですが、父の乗っていた飛行機が大菩薩峠付近で遭難しました。遺骨を取りに行ったのが戦争が終わった後なのかどうかは分らないのですけれども、その遺骨を取りに母が母の妹と二人で行く時に非常にもう列車事情が悪く、確か広島の前だったと思うんですね。それで「広島にすごい爆弾が落ちたそうだ」「人間の皮が一瞬に剥けてしまうような、そういう爆弾が落ちたそうだ」という話を、遺骨を持って帰った母がしておりました。

そのわたくしの自分の詩の訳をちょっと読んでみますので、二七七頁の「原爆のことをはじめて聞

いた日」をご覧になりながらお聴きください。

## THE DAY I FIRST LEARNED OF THE ATOMIC BOMB

From my mother I learned of it on the day my father's ashes came home.

My mother and aunt had gone a great distance,  
to the place of my father's new appointment  
where his remains were returned.

With our grand-parents,  
we, children waited anxiously for Father's return.

Mother and aunt came back completely exhausted.

"We could hardly board the train,  
with passengers even clinging to the roof;  
throwing their baggage through the window, people got on--  
The stronger ones the worst.

No one respects the remains of the war dead."

"They said a new type of bomb had fallen--  
in only a moment humans were completely stripped of all skin."

In our evacuation home.

the square wooden box wrapped with white cloth rested.  
We didn't know for a certainty whether the remains were my father's or not,  
but these were the remains  
of those ten souls who shared the same fate,  
of those who shared their last moment in the same plane.  
Compared to the ashes of the tens of thousands of war dead  
whose ashes were never returned,  
we should appreciate something like ashes coming home.

My aunt who accompanied mother on that trip

has already passed away;  
mother is still with us,  
though all memories in her brain have perished--

The new bombs they learned of in the train,  
perhaps, the Atomic Bomb in Hiroshima.

The newly-created weapon which instantly stripped off human skin  
fell also in Nagasaki;

So the war ended.

I can't now ascertain the date when they went to receive father's ashes,  
before the end of war or after,

The day I first learned of the Atomic Bomb  
was the day my father's ashes returned.

郡山直 どうもありがとうございました。以上で第三部を終わります。(一同拍手)

鈴木比佐雄 本日は遠い所からたくさん集まってくださりまして、どうもありがとうございました。これだけの仕事のできたのも、やはり皆さんの一篇一篇の力だとほんとうに感謝しております。

今年の二月くらいに長津さんから原爆詩集と一緒にやろうというような話があったのですが、実は昨年の春にも私は「長津さん、そろそろ私とやりませんか」と持ちかけたこともあったのですが、「ちょっと待ってくれ。出版社と今やっているから」と。今から二年以上前にもそういう話があって、その時私が「もし私にやらせてくれれば、やりますよ」というような話もしたと思います。それはたぶんどんなに大きな出版社でもこの出版は難しいのではないかと思っていたのです。それはやはりモチベーションというか、原爆詩を書いている現役の詩人のことを分かっていないとか、原爆詩人のことが本当の価値が分かっていなければ編集は無理ではないかという思いがあったのです。それは、私が二十年前に「COAL SACK」誌を始めた時に鳴海英吉さんを誘ったのですが、鳴海さんはちょうどその年に『広島・碑文』という詩集を十部か二十部つくって私の所にも送って来たのですが、広島の連作を書かれていた。ちょうどその時に長崎の入江昭三さんが癌に罹って私の所にも遺言状のような私信を送ってくれたのです。私は「COAL SACK」を始める前に「詩的現代」という詩誌をやっていてそれを終刊にしたのですが、その時に「もう自分の命はあと数カ月だけれども、今まで雑誌を送ってくれてありがとう。これからも頑張ってください」という私信に私はすごく感動しました。やはり詩誌の編集者というのは命を賭けて雑誌を出すものだと思います。そういうこともありました。私は鳴海さんや入江さんのような生涯をかけて詩作をした詩人たちを後世に残したいという思いがあります。

それで私は七八年から「COAL SACK」(石炭袋)を創刊しました。そして鳴海さんが浜田知章さんを紹介してくれました。私は浜田さんと九四年くらいに親しくなっていました。私が『浜田知章全詩集』をつくる一つのきっかけになったのは浜田知章論を書きたいから浜田さんの全てのものを読み下さいということで浜田さんのご自宅に行きました。すると浜田さんから私に小倉豊文さんの『ノー・モア・ヒロシマ』というのを出して「これは自分が編集したものだ」と手渡されました。そして小倉豊文さんという『絶後の記録』を書いた素晴らしい人がいると言われました。私は小倉豊文さんは賢治の「手帳」の研究をされていたので賢治研究者というような認識があったのですけれども、そういうような被爆の平和運動もされていた方だなと知りました。私は『絶後の記録』手引きとして、浜田さん、鳴海さんから促されて、私は九七年に広島に行きました。そうしたら長津さんが待っていてくれて、御庄博実さん、福谷昭二さんとかいろいろな方を紹介してくださいました。それとまた九九年、朝鮮人被爆者が引き揚げて暮らしていた陝川(ハプチョン)のことをずっと調べて八千行もの詩集にした高炯烈さんと出会いました。「COAL SACK」にそれから七年間翻訳をして、二〇〇六年に『長詩 リトルボーイ』をつくったのですが、またその出版記念会で長津さんとか広島の詩人達がたくさん応援してくれました。

そういう過程の中から長津さんが「コールサックしかないのかな」と思われたのではないかなと思うんですね。(笑)それが今年の二月なのですが、実際に編集会議というのは、先ほど金沢のお二人、うおずみさんと千葉さんが話されましたけど、金沢に行く新幹線や列車に乗った四、五時間に二人で一生懸命話しまして、それでだいたい今の編集方針が決まりました。そのことは山本さんにも伝えて、それから三人で開始しました。

今日はスタッフ、この実際の実務者を紹介したいと思います。

実際の入力作業とか組版をしたスタッフのリーダーの前田洋司さん、それからデザイナーの高橋美津穂さんです。ほんとうは装幀表紙画を描いてくださった詩人で日本画家だった福田万里子さんをご紹介したいけど、福田さんは昨年の八月十二日に亡くなられてしまいました。それと、校正の宮本登美子さんと葛原りょうさん。その他に前田さんの下にまだまだいろいろスタッフがいるのですが、そういうスタッフの力で、いちおう四月後半から「COAL SACK」で公募して、もう五月十五日には閉め切って、そう考えると、もう二か月くらいでつくったんですね。でも、それまでに実はすごい原爆詩を書いていた詩人のストックがあったんですよ。それは「COAL SACK」に集まっていた詩人たちがいたということもあるし、私が戦争責任を担っている詩人たちの評論を書いていたということもあるし、また多くの詩人の詩集の中の原爆詩を読んでいたということもあります。例えば長崎で言えば先ほどの入江昭三さんもそうですし、そのあとを引き継いだ上滝望観さんもそうですし、あと、長崎で言うと柳生じゅん子さんとか、または九州で言うと金丸柊一さんとか、いろんな形の多くの詩人の中に原爆詩があるということが分かっていたのです。分かっている、「これを集めたらみんながびっくりするはず

だ」と。そういうようなことはずっと考えていました。それを誰かがやるだろう、誰かがやらなくてはいけない、と思っていた。長津さんもそれは自覚していたと思うのですが、そういう意味ではもう私は出るべくして出た本ではないかと思えます。

でもこのことを初めに考えたのはたぶん栗原貞子さんや峠三吉さんたちで、原爆詩というのは世界文学だというふうに考えていたと思う。さらに浜田知章さんは一九五二年の「山河」一―号で長谷川龍生さんと原爆特集を試みて自覚的に原爆詩の可能性を広げたんですね。一九五二年のその時点でかなり自覚的に原爆詩というものは世界文学の大きなテーマだということは明確になってきたのではないかと思いますね。それをずっと、六十二年間の成果を集めたので、この本が多くの人の心をとらえないはずはないと思い、私はいちおう三千部を刷りました。今二版目の三千部を刷って合計三千五百くらい読まれているのですが、本当はあと十倍は売れてもいいと思っています。ゆっくりと広がっていけば願っています。

あと言い足りなかったことは、嵯峨信之さんという詩人がいましたが、私は小学校時代に嵯峨信之さんの「ヒロシマ神話」という詩を教科書か何かで読んだと思うのです。そういうことも残っていました。実際に嵯峨さんとは九〇年に会ってそのことを話したら、「ああ、あれはねえ、印税がたくさん入ってよかったんだよ」なんて話していました。「でも最近教科書に載ってないから、印税が入らない」なんてそのころは言っていましたけれども。

もっともこの『原爆詩集』の中から教科書に載るような方向になってほしいと思っていますし、そして皆さんの詩が教科書に載って皆さんに印税が入って欲しいと願っています。ちょっとうちのスタッフから……。

前田洋司 今度『原爆詩一八一人集』英語版の出版に向けて編集しているのですが、私も全力を尽くして頑張っていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。(一同拍手)

高橋美津穂 直接お顔を拝見しないで装幀デザインをさせていただいてしまったのですけれども、原爆詩の方も福田様の絵をちょっとお借りしてつくったのですが、赤く燃える原爆ドームの周りにやはり赤い花が輪になっていて、ちょっと素敵な絵だなと思いました。これから英語版の方もどんどん進んでいますので、皆様よろしく願いいたします。(一同拍手)

主催者の挨拶

山本十四尾 本日はほんとうに一日長い時間お力添えをいただきまして、ありがとうございます。この英訳版が出て我々の地道な活動から世界に発信できるようにさらに努力を重ねていきたいと思えますので、さらなるお力添えをお願いしてこの会を終わりにしたいと思います。(一同盛大な拍手)